

假名手本忠臣藏

第一

嘉肴ありと云々
 雖有嘉肴弗
 食不知其旨
 雖有至道不
 學不知其善
 禮記にあつて太
 平の世には穿鑿
 せざれば忠臣顯
 はれずとなり
 譬一たとへ、た
 とへばと兩方に
 かけたり
 羽をのす一羽は
 鶴の縁語威を振
 ること

嘉肴かうあり有といへども食しよくせざれば其味あじはひをしらずとは、國治をさまつてよき武士ぶしの、忠ちゆうも武勇ぶゆうも隠かくるよに、譬たとへば星の晝見ひるみへず、夜は亂みだれて顯あらははるよ、例たとひを爰こゝに假名書かながきの、太平たいへいの代の政まつごと、比ひは曆りやく應元おうぐわん二年二月下旬にんねん ぐわつふじゆん、足利將軍あしかがしやうぐん尊氏公たかうぢこう、新田義貞にった よしただを討うち亡ほろし、京都きやうとに御所ごしよを構かまへ、徳風とくふう四方かたに普あまねく、萬民ばんみん草の如ごとくにて靡なび從したがふ御威勢おんゐせい、國くにに羽はをのす鶴つるが岡おか、八幡宮まんげうぐ御造營ごういじやうじ成就じゆし、御代參ごだいさんとして御舍弟ごしやてい足利左兵衛督あしかがさむすぶ直義公ちかよきこう、鎌倉かまくらに下著ひちやくなりければ、在ざい鎌倉かまくらの執事高しつじかう武藏守むさしのかみもろなほ師直おんひびもぢ、御膝元おんひざもとに人を見下みおろす權柄眼けんぺい、御馳走ごちそうの役人やくにんは、桃井播磨守ももゐのはりまのかみが弟おとう若狹助わかさのすけ安近あき、伯朧はくろうの城主じやうしゆ鹽治判官しゆぢはんぐわん高定かうてい、馬場ばば先に幕打廻まくうちめがらし、威儀ゐぎを正ただして相詰あひつむる。直義ちかよき仰出おほいさるよは、「いかに師直もろなほ、此唐櫃このからひつに入置いれおきしは、兄尊氏あにたかうぢに亡ほろされし新田義貞にった よしただ、後醍醐ごたいごの天皇てんわうより給たまはつて著ちやくせし兜かぶと、敵かたきながらも義貞よしただは清和源氏せいわげんじの嫡流ちやくりゆう、著捨きすての兜かぶとといひながら、其儘

本阿彌—目利
役、本阿彌は刀
鑢鑢定の名家

蘭奢待—奈良正
倉院にありとい
ふ名香

海老鎖—海老の
如く屈むと海老
型の錠
とつばい頭—兜
の鉢
指物—鎖の背部
にさす目標の小
旗

の御内室かほよ殿、最前より嘸待遠。御太義く。御前の御召近ふく」と取持顔。直
義御覽じ、「召出す事外ならず。往元弘の亂に、後醍醐帝都にて召れし兜を、義貞に給は
つたれば、最期の時に著つらん事、疑ひはなけれ共、其兜を誰有て、見しる人外になし。
其比は鹽治が妻、十二の内侍の其内にて、兵庫司の女官なりと聞及ぶ。嘸見知あらんず。
覺あらば兜の本阿彌、目利々々」と女には、嚴命さへも和らかに、お受申も又嫺か、「其
加に余る君の仰。夫こそは私が、明暮手馴し御著の兜。義貞殿拜領にて、蘭奢待といふ
名香を添て給はる。御取次は則かほよ。其時の勅答には、人は一代名は末代、すは討
死せん時、此蘭奢侍を思ふ儘、内兜に炷しめ著ならば、鬢の髪に香を留て、名香かほる
首取しといふ者あらば、義貞が最期と思召れよとの、詞はよもや違ふまじ」と、申上た
る口元に、下心有師直は、小鼻いからし聞居たる。直義くはしく聞し召し。「チ、詳成
かほよが返答。さあらんと思ひし故、落散たる兜四十七、此唐櫃に入置たり。見分させ
よ」と御上意の下侍、屈むる腰の海老鎖を、明る間遅しと取出すを、おめす臆せず立寄
て、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜、とつばい頭獅子頭、扱指物は家々の、流義
流義に寄るぞかし。或は直平筋兜、鍔のなきは弓の爲、其主々の好逆、數々多き其中

五枚兜―鍔五枚
つきの龍頭ある
兜

段かづち―石段
路
つきはなく―極
悪く

吉田の兼好云々
―兼好師直の爲
に聖書を書きし
事太平記に見ゆ
武藏鎧―武藏守
を灰めかず伊勢
物語の訪へばい
ふ訪はねば恨む
武藏鎧かゝる折
にや人は死ぬる
んの歌による
はしたなう―不
遠慮に
手に觸れ―戀人
の手にふれ

にも、五枚兜の龍頭、是ぞと云はぬ其内に、ばつと薰りし名香は、「かほよが馴し義貞の
兜にて御座候」と指出せば、左様ならめ、と一決し、直「鹽冶桃井兩人は、寶藏に納むべ
し、此方へ來れ」と御座を立、かほよに御暇給はりて、段かづちを過給へば、鹽冶桃井
兩人も、打連れてこそ入にける。跡にかほよはつきほなく、「師直様は今暫し、御苦勞な
がら御役目を、御仕舞有て御靜に。御暇の出た此かほよ、長居は恐れおさらば」と、立
上る袖摺寄てじつと扣へ、鯉コレまあお待待給へ。今日の御用仕舞次第、其元へ推參し
て、御目にかける物が有。幸の能い所、召出された直義公は我爲の結の神、御存の如く
我等歌道に心を寄、吉田の兼好を師範と頼日々の狀通、其元へ届くわよと問合の此書狀。
いかにもとのお返事は、口上でも苦しうない」と、袂から袂へ入るゝ結び文、顔に似合
ぬえ參る、武藏鎧と書たるを、見るよりはつと思へ共、はしたなう恥しめては、かへつ
て夫の名の出る事、持歸つて夫に見せふか、いやゝ夫では鹽冶殿、憎しと思ふ心から、
怪我過にもならふか、と物をもいはず投返す。人に見せじと手に取上、鯉戻すさへ手に
觸れたりと思ふにぞ、我文ながら捨も置れず。くどうは云ぬよい返事聞返は、口説いて口
説いて口説き拔、天下を立ふと伏ふ共儘な師直、鹽冶を生ふと殺そふ共、かほよの心たつ

涙―なしにかく

いはれぬ出過―
いらぬ出過ぎた
詞

五器提ふ―梶提
るにて乞食にな
るをいふ

詞の先手―詞の
先に先手のもの

た一つ、何とそふでは有まいか」と、聞にかほよが返答も、涙ぐみたる計なり。折から
來合す若狹助、例の非道と見て取氣轉。考かほよ殿まだ退出なされぬか。御暇出て隙取
るは、却て上への恐れ。早お歸り」と追立てば、彼奴扱はけどりし、と弱味を喰はぬ高
師直、「ヤア又してもいはれぬ出過、立て能ければ身が立す。此度の御役目、首尾能う勤
させくれよと、鹽冶が内證かほよの頼。そふなくて叶はぬ筈。大名でさへあの通。小身
者に捨知行誰が影で取する。師直が口一つで、五器提ふも知れぬあぶない身代。夫でも
武士と思ふじや迄」と、邪魔の返報憎體口。くはつとせき立若狹助、刀の鯉口碎る程、握
り詰は詰たれ共、神前なり御前なりと一旦の堪忍も、今一言が生死の、詞の先手還御ぞ
と御先を拂ふ聲々に、詮方なくも期を延す、無念は胸に忘れず、悪事悖て運強く、切
れぬ高師直を、翌の我身の敵共、知らぬ鹽冶が跡押へ。直義公は悠々と、歩御成給ふ御
威勢、人の兜の龍頭、御藏に入る數々も、四十七字のいろは分、假名の兜を和らけて、兜
頭巾の綻びぬ、國の掟ぞ、三重久方の。

第二

ため付―身装を
繕ふ
づつかちない―
大きい

胴を取―博奕打
の元方をする

さがなき―祥な
きにてよくない

ほんさう―奔走
子にて大切な一
人娘

御前―若狭助の
奥方

空も彌生の黄昏時、桃井若狭助安近の、館の行義はき掃除、御庭の松も幾千代を、守る館の執權職、加古川本藏行國、年も五十の分別盛、上下ため付書院先、步行來るとも白洲の下人、可ナント關内、此間は御上には、でつかちないお拵。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社參、おびたどしいお物入。ア、其銀の入目が欲しい。其銀が有たら此可介、名を改めて樂しむになア」團何じや、名を改めて樂しむとは珍らしい。そりや又何と替る」可ハテ角助と改めて、胴を取て見る氣」團ナニばかつ面な。わりや知らないか。昨日鶴が岡で、是の旦那若狭助様、いかふ不首尾で有たけな。子細は知らぬが師直殿が、大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定て又無理をぬかして、御旦那をやりこめおつたであろ」と、さがなき口々、本「ヤイ、何をさはくと喧しいお上の取沙汰。殊に御前の御病氣、お家の恥辱に成こと有ば、此本藏聞流し置べきや。禍は下部の咎、掃除の役目仕廻たら、皆往け」と和らかに、女小性が出出る、煙草輪をふく雲をふく、廊下音なふ衣の香や、本藏がほんさうの一人娘の小浪御寮、母のとなせ諸共に、しとやかに立出れば、本「是はく、兩人とも、御前の御伽は申さいで、自身の遊か不行義千萬」「イエ、今日は、御前様殊の外の御機嫌。今すやくと御休。夫でナア母様」となせ「イヤ申

口癖—下に取上るに足らずの語を入れて見るべし

べしてもない—格別の事でもない

本藏殿、先程御前の御物語、昨日小浪が鶴が岡へ御代參の歸るさ、殿若狹助様高師直殿、詞争ひ遊ばせしとの御噂、誰が言ふとなくお耳に入、それはくきつい御案じ。夫本藏子細委しく知ながら、自に隠すのかやと御尋遊ばす故、小浪に様子を尋ねれば、是も私と同じ事、何にも様子は存ませぬとのお返事。御病氣の障お家の恥に成事なら」本「ア、これくとなせ、夫程のお返事なせ取繕うて申上ぬ。主人は生得御短慮なるお生れ付、何の詞諍ひなどは、女わらべの口癖。一言半句にても、舌三寸の誤りより身を果すが刀の役目。武士の妻でないか、それ程の事に氣が付ぬか、嗜めさく。ナニ娘、そちは又御代參の道すがら、左様の噂はなかりしか、但有たかナニ無い。ヲ、其筈々々、ハ、ハ、ハ、なんのべしてもない事を。よし、奥方の御心休め、直に御目にかからん」と、立上る折こそあれ、常番の役人罷出、「大星山良助様の御息、大星力彌様御出なり」と申上る。本ム、御客御馳走の申合せ、判官殿よりのお使ならん。此方へ通せ。コレとなせ其方は御口上受取、殿へ其通り申上られよ。御使者は力彌、娘小浪と云號の聲殿、御馳走申しやれ。先奥方へ御對面」と云捨、一間に入にける。となせは娘を傍近く、「なふ小浪、父様の堅くろしいは常なれど、今仰しやつた御口上、請取扱は其方

アイター逢たい
にかく
逢ひたからう一
家老にかく

にと有そな所を、となせにとは、母が心とはきつい違ひ。其許も又力彌殿の顔も見たか
ろ、逢たかろ。母に代つて出向かやや。いやかく」と問返せば、あい共いや共返答は、赤
らむ顔のおほこさよ。母は娘の心を汲、「アイタ、娘背を押したも」小鳥是は何と遊
ばせし」と、狼狽へ騒げば、母「イヤなふ、今朝からの心遣ひ、又持病の積が指込だ。是で
はどふも御使者に逢れぬ。アイタ、娘太義ながら御口上も受取、御馳走も申てたも。
御主と持病には勝れぬ」と、そろく」と立上り、「娘や随分御馳走申しやや。したが
餘り馳走過、大事の口上忘れまいぞ。私も聲殿にアイタ、逢ひたからうの奥様は、氣
を通してぞ奥へ行。小浪は御跡伏拜みく、忝い母様、日比戀し床しい力彌様、逢はど
どふいを、かういと、娘心のどきくと、胸に小浪を打寄る、聲ざはりも故實を糺
し、入来る大星力彌、まだ十七の角髪や、二つ巴の定紋に、大小立派、爽に、道大星由
良助が子息と見へし其器量、徐々と座に直り、力誰お取次頼奉る」と、慇懃に相述る。
小浪ははつと手をつかへ、じつと見交す顔と顔、互の胸に戀人と、物も得云はぬ赤面は、
梅と櫻の花相撲に、枕の行司なかりけり。小浪漸胸押鎮め、「是はく御苦勞千萬に能ふ
こそお出。只今の御口上受取役は私。御口上の趣を、御前の口から私が口へ、直に仰しや

つて下さりませ」と、摺寄すりよば身を控ひかへ、カ「ハア是はく不作法ふせふせんぽう千萬。惣おじて口上受取渡うけとりわたしは、行義作法第二」と、疊たたみを下り手をつかへ、「主人鹽治判官より若狹助様への御口上。明日は管領直義公へ、未明より相詰申答の所、定めて御客人も早々にお出あらん、然れば判官若狹助兩人は、正七つ時に急度御前へ相詰よ、と師直様より御仰。萬事間違のなき様に、今一應御使者に參れ、と主人判官申付候故右の仕合。此通若狹助様へ御申上下さるべし」と、水を流せる口上に、小浪はうつかり顔見とれ、とかふ諾もなかりけり。「チ、聞たく、使太義」と若狹助、一間より立出、「昨日お別れ申てより、判官殿間違て御目にかゝらず。成程正七つ時に貴意得奉らん、委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千萬と、宜しく申傳へてくれられよ。御使者太義」カ「然らば御暇申上ん。ナニ御取次の女中御苦勞」と、徐々立て見向もせず、衣紋繕ひ立歸る。本藏一間より立代り、「ハア殿是に御入。彌明朝は、正七つ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九つ、暫御間睡遊ばされよ」蓋成程々々。イヤ何本藏、其方に少用事有密々の事、小浪を奥へく」本「ハアコリヤく娘、用事あらば手を打う。奥へく」と娘を追遣り、合點の行ぬ主人の顔色と、御傍へ立寄、「先程よりお伺ひ申さんと存ぜし所、委細具に御仰下さるべし」と指寄

金打―武士の互に
に誓ふ時に刀と
刀を合す

官領―管領

勝に乘て―つけ
上つて

思はん―思はぬ

ば、にじり寄、若、本藏、今此若狭助が云出す一言、何に寄す畏り奉ると、二言を返さぬ誓言聞ふ」本ハア是はく改まつた御詞、畏り入奉るでは御座れ共」若、武士の誓言はならぬといふのか」本、イヤ左にあらず。先委細とつくと承はり」若、子細を云はせ跡で異見か」本、イヤ夫は」若、詞を背くか。サア何と」本、ハツはつ」と計指うつむき暫く詞なかりしが、胸を極めて指添拔、片手に刀拔出し、てうくく」と金打し、本、本藏が心底斯の通り、留めも致さず他言もせぬ、先思召の一通、お急きなされずと、本藏めが胃の腑に落付様に、とつくりと承はらん」と相述る。若、ム、一通り語つて聞せん、此度官領足利左兵衛督直義公、鶴が岡造營故、此鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽治判官、某兩入承はる所に、尊氏將軍よりの仰にて、高師直を御添人、萬事彼が下知に任せ御馳走申上よ、年配といひ諸事物馴れたる侍と御意に随ひ勝に乘て、日比の我儘十倍増、都の諸武士竝居る中、若年の某を見込雑言過言。眞二つにと思へ共、お上の仰を憚り、堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早了簡ならず、御前にて恥面かよせる武士の意路。其上にて討て捨る。必留るな。日比某を短慮成と、奥を始其方が異見、幾度か胸にとつくと合點なれ共、無念重る武士の性根、家の斷絶奥が歎、思はんにては無けれ共、刀の役

さみする―輕蔑
除けて通す―人
に一步を譲る
かたし片手云々
―草履片一方に
て小刀の切味の
鈍りしを研ぎ直
す
さつぱりと遊ば
せ―師直を此松
ケ枝の如くスツ
バリと斬り給へ
股立云々―家來
が股立取て勇ま
しく

目弓矢神への恐れ。戰場にて討死はせず共、師直一人討て捨れば天下の爲、家の恥辱に
は替へられぬ。必々短氣故に身を果す若狹助、猪武者よ狼狽者と、世の人口を思ふ故、汝
にとつくと打明す」と、思込たる無念の涙、五臓を貫く思ひなる。横手を拍つて、本したり
したり、ム、能う譯を仰しやつた、能う御了簡なされた。此本藏なら今迄了簡はならぬ
所」若ヤイ本藏、ナ、何と云た。今迄はよう了簡した堪忍したとは、わりや此若狹助を
さみするか」「是はお詞とも覺へず。冬は日陰夏は日面、除けて通れば門中にて、行違の
喧嘩口論ないと申は町人の譬、武士の家では杓子定規。除けて通せばはうづがない、と
申のが本藏めが誤りか。御詞さみ致さぬ心底、御覽に入ん」と御傍の、小刀抜より早
く書院成、召替草履かたし片手の早ねた刃、とつくと合せ榎先の松の片枝、すつばと切
て手ばしかく鞘に納め、「サア殿、先此通にさつぱりと遊ばせく」と「若言ふにや及ぶ。人
や聞」と邊に氣を付、本、今夜はまだ九つ、くつたりと一休。枕時計の目覺本藏めが仕掛
置、早くく」と「若ヤ、聞入有て満足せり。奥にも逢て余所ながらの暇を。モウ逢ぬぞよ
本藏。さらばく」と云捨てよ、奥の一間に入給ふ、武士の意氣地は是非もなし。御後
影見送りく、勝手口へ走出、本、本藏が家來共、馬引早く」といふ間もなく、股立しや

んととりよし氣に、一御庭に引出せば、椽よりひらりと打乗て、「師直の館迄續けや續け」と乗出す、轡に縋つてとなせ小浪、「コレく何處へ。始終の様子は聞きました。年にこそよれ本藏殿、主人に御異見も申さず、合點行ぬ留ます」と、母と娘がぶらくく、轡に縋り留むれば、本「ヤア小差出た。主人のお命、御家の爲思ふ故に此時宜。必此事殿へ御沙汰致すな。お耳へ入たら娘は勘當、となせは夫婦の縁を切。家來共道にて諸事を云付ん。其處退け兩人」二人「イヤくくく」本「シャ面倒な」と鎧の端、一當はつしと當られて、うんと計に仰向に反を見向もせず、「家來續け」と馬煙、追立打立力、足踏立てこそ三重駈り行。

第三

足利左兵衛督直義公、關八羽の官領と新に建し御殿の結構、大名小名美麗を飭る公装束、鎌倉山の星月夜と、袖を列ぬる御馳走に、お能役者は裏門口、表御門はお客人御饗應の役人衆、正七つ時の御登城、武家の威光ぞ耀きける。西の御門の見付の方、「ハイハイく」といかめしく、挑燈照し入來るは、武藏守高師直、權威を顯はす鼻高く、花色

花色云々―縹色
にて家の紋を大
きくしたる布製の
直垂
召おろし―古
頂戴
とつばさつば云
云―大さうに振
舞へど
狗を云々―詮方
なき諺
腹の皮―笑ふ事

こまつけ―手な
づけ

模様の太紋に、胸に我慢の立烏帽子、家來共を役所々々に残し置、下部僅に先を拂はせ、
主の威光の召おろし、鶴の眞似する鷺坂伴内、肩背いからし、年申お旦那、今日の御前
表も上首尾く。鹽冶で候の、イヤ桃井で候のと、日比はとつばさつばとどしめけど、
行儀作法は狗を、家根へ上げた様で、さりとほく腹の皮。イヤ夫に付兼々鹽冶が妻か
ほよ御前、いまだ殿へ御返事致さぬ由、お氣にはさへられな、器量はよけれど氣が叶は
ぬ。何の鹽冶輩と、當時出頭の師直様と一師ヤイく聲高に口利な。主有かほよ、度々
歌の師範に事寄、口説け共今に叶ぬ、則彼が召使、かるといふ奴新參と聞、彼奴をこ
ま付て頼で見ん。扱まだ屑が有。かほよが誠にいやならば、夫鹽冶に子細をぐはらり打
明る所を云ぬは樂」と、四足門の片陰に、主從點頭咄し合ふ折もあれ、見附に扣へし侍
遽しく走出、「我々見附のお腰掛に控へし所へ、桃井若狭助家來加古川本藏、師直様へ直
にお目にかゝらん爲、早馬にてお屋敷へ参つたれ共早御登城、是非御意得奉らん、と家
來も大勢召連たる躰、如何計ひ申さんや」と、聞より伴内騷出し、「今日御用の有師直様へ、
直に對面とは推參なり。某直談」と走行を、「待々伴内子細は知た一昨日鶴が岡にての
意趣晴し、我手を出さず本藏めに云付け、此師直が威光の鼻を挫がん爲、ハ、ハ、ハ、伴内

手やすね引て
待ちかまへて

左少一些少

憚入一痛入

ぬかるな。セツにはまだ間もあらん、是へ呼出せ仕廻てくれん」伴「成程く、家來共氣を配れ」と、主従刀の目釘を濕し、手ぐすね引て待掛居る。詞に隨ひ加古川本藏、衣紋繕ひ悠々と打通り、下部に持せし進物共、師直が目通に竝べさせ、遙下つて蹲る。本「ハア憚りながら師直様へ申上奉る。此度主人若狹助、尊氏將軍より御大役仰付られ下さる段、武士の面目、身に餘る仕合。若輩の若狹助、何の作法も覺束なく、いかどあらんと存る所に、師直様萬事御師範を遊ばされ、諸事を御引廻し下され候故、首尾能御用相勤るも全主人が手柄にあらず、皆師直様の御執成と、主人を始め奥方一家中我々迄も、大慶此上や候べき。さるによつて近比左少の至に候へ共、右御禮の爲一家中よりの送り物、お受遊ばされ下さらば、生前の面目一入願ひ奉る。則目録御取次」と、伴内に指出せば、不思議そふに密と取押開き、伴「目録一ツ巻物卅本黄金三十枚若狹助奥方、一ツ黄金二十枚家老加古川本藏、同十枚番頭、同十枚侍中、右の通」と讀上ぐれば、師直明た口閉がれもせずつとりと、主従顔を見合せて氣拔の様にきよろりつと、祭の延た六月の晦日見るが如くにて、手持不沙汰に見へにける。俄に詞改て、師「是はくく憚入たる仕合、伴内こりやどふした物。ハテ扱々、ハア御辭宜申さばお志背くといひ、第一は大きな

倍臣—陪臣

金で煩張る云々
—本藏は金で若
狹助の命をとり
とめる
白鼠—忠臣

無禮。エ、式作法を教ふるも、こんな折にはとんと困る。ナニ物じやは、イヤハヤ本藏

殿、何の師範致す程の事も無いが、兎角マア若狹助殿は器用者、師範の拙者及ばぬ。

コリヤ伴内進物共皆取納め。エ、不行儀な、途中で御茶さへ得進ぜぬ」と、手の裏返す揆

拶に本藏が胸算用、仕て遣つたりと猶も手をつき、「最早七つの刻限早お暇。殊に今日は

猶公の御座敷。彌主人の義御引廻し頼存る」と、立んとする袂を控へ「餌ハテゑいわい

の。貴殿も今日の御座敷の座次の拜見なされぬか」本「イヤ倍臣の某御前の恐」餌「大事な

い、此師直が同道するに、誰がくつといふ者無い。殊に又若狹助殿も、何ぞれかぞ

れ小用の有物、平にく」と、勧められ、「然らば御供仕らん。御意を背は却つて無禮。先

お先へ」と跡に付、金で煩張る算用に、主人の命も買て取る、二一天作算盤の桁を違ぬ

白鼠、忠義忠臣忠孝の、道は一筋真直に、打連御門に入にける。程もあらさず入来るは、

鹽治判官高定。是も家來を残し置、乗物道に立させ、譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の

新袴、ざはくざはつく御門前、「鹽治判官高定登城成」と音なひける。門番罷出、「先程

桃井様御登城遊ばされ御尋。只今又師直様御越にて御尋。早御入」と相述る。判「ナニ勘

平最早皆々御入とや。遅なはりし残念」と、勘平一人御供にて、御前へこそは急ぎ行。奥

假名手本忠臣藏

播磨湯一謡曲高
砂の匂に張り上
るをかく
所跡―身装
奇特帽子―奇特
頭巾

の御殿は御馳走の、連謠の聲播磨がた、謠高砂の浦に著にけりく。謠ふ聲々門外へ、
風が持来る柳蔭、其柳より風俗は、負けぬ所跡の十八九。松の緑の細眉も、堅い屋敷に
物馴し、奇特帽子の後帯、供の奴が提灯は、鹽冶が家の紋所、御門前に立休らひ、女「コ
レ奴殿、頓てもふ夜も明る。此方衆は門内へは叶はぬ、爰から往んで休んでや」と、詞に
随ひ、奴「ナイく」と、供の下部は歸りける。内を覗いて「勘平殿は何してぞ、どふぞ逢た
い用が有」と見廻す折から後影ちらと見付、勘「おかるじやないか」か「勘平様、逢たか
つたにようこそく」勘「ム、合點の行ぬ夜中といひ、供をも連す只一人」か「さいなあ、
爰迄送りし供の奴は先へ歸した。わたし獨残りしは、奥様からのお使、どふぞ勘平に逢
て此文箱、判官様のお手に渡し、お慮外ながら此返歌を、御前のお手から直に師直様へ、
お渡しなされ下さりませと傳へよ、併しお取込の中、間違ふまい物でなし、マア今宵は
よしにせう、とのお詞。わたしはお前に逢たい望、何の此歌の一首や二首、御届なさる
程の間の無い事は有まい、とつる一走に走て來た。ア、しんどや」と吐息つく。「然ら
ば此文箱、旦那の手から師直様へ渡せば宜いじや迄。どりや渡して來ふ待て居い」と、い
ふ中に門内より、「勘平く判官様が召まする。勘平く」勘「ハイくく」只今それへ、

しんどや―辛い
よいじや迄―迄
は強辭にて意な
し

鯨踏云々―よき都合と忍び寄る形容が鯨ふむわにかく

あた―罵聲

あけ古い―いつもいふ冗戯はあけとなりはづんだ―せき込んだ

松根に倚つて云云―謠曲高砂の

エセはしない」と袖振切て行跡へ、鯨踏む足付鷺坂伴内、「何とおかる、戀の智恵は又格別。勘平めとせよくつて居る所を、勘平々々旦那がお召と呼だは、きついかく。師直様がそもじに頼たい事が有と仰しやる。我等はそさまにたつた一度。君よく」とだきつくを突飛し、かる「コレみだらな事遊ばすな。式作法のお家にゐながら狼藉千萬。あた不法な、あた不行義」と突退れば、伴夫は難面。暗がり紛につるちよく」と、手を取争ふ其中に、「伴内様く師直様の急御用。伴内様く」と、奴二人がうろく眼玉で、「是はしたり伴内様、最前から師直様が御尋。式作法のお家にゐながら、女を捕へてあた不行義な、あた不法」と下部が口々、伴エ、同じ様に何ぬかすと、頬膨らして連立行。勘平跡へ入替り、「何と今の働見たか。伴内めが一ぱい喰ふてうせおつた。おれが来て旦那が呼しやるといふと、おけ古いとぬかすが面倒さに、奴共に酒吞せ、古いと云さぬ此術。ハ、くくくまんまと首尾は仕課せた」かる「サア其首尾尾にな、ちよつとく」と手を執ば、勘ハテ扱はづんだ。マア待ちやいの」かる「何いはんすやら、何の待事が有ぞいなア。もふ頓て夜が明るわいな。是非にく」に是非なくも、下地は好なり御意はよし、「夫でも爰は人出入」奥は謠の聲高砂、謠松根に倚つて腰を摩れば、「アノ謠で思ひ

句にて朗詠集に
倚松根而摩腰
千年翠滿手よ
り出てたり

假令一幸

やくたいーたは
いもな

付た、イザ腰掛で」と手を引合打連て行。脇能過て御樂屋に、鼓の調太鼓の音、天下泰平繁昌の、壽祝ふ直義公、御機嫌斜ならざりける。若狹助は兼て待師直遅しと御殿の内、奥を窺ふ長袴の、紐締括り氣配り、己師直眞二つと、刀のこの口息を詰、待共知らぬ師直主従遠目に見付、「是はく若狹助殿、扱々お早い御登城。イヤハヤ我折ました。我等閉口く。イヤ閉口序に貴殿に云譯致し、御詫申事が有」と、兩腰ぐはらりと投出し、「若狹助殿改めて申さねばならぬ一通。日外鶴が岡で、拙者が申た過言、ヲ、御腹が立たで有ふ尤じやが、そこを御詫。其時はどふやらして詞の間違でつい申た。我等一生の龜忽、武士がコレ手を下る眞平く。假令其元が物馴たお人なりやこそ、外々の狼狽者で見さつしやれ、此師直眞二つ怖やく。有やうが其節貴殿の後影、手を合して拜ました。アハ、ア、年寄とやきたいく。年に免じて御免く。是さく、武士が刀を投出し手を合す。是程に申のを聞入ぬ貴公でもないはさ。兎角幾重にも誤りく。件内俱々に御詫々々」と、金がいはする追従とは、夢にもしらぬ若狹助、力身し腕も拍子拔、今更拔にぬかれもせず、ねた刃合せし刀の手前さし俯し思案顔、小柴の陰には本藏がまたよきもせず守居る。餌ナニ件内、此鹽治はなぜ遅い。若狹助殿とはきつい違ひ、扱々不行義

御内賢―御内室
さなきだに云々
―新古今不邪淫
戒の歌にて同書
にはさちぬだに
とあり衣の襟と
夫とかけたり

者、今において頼出しせぬ。主が主なれば家老で候とて、諸事に細心のつく奴が獨もな
い。いざく若狹助殿御前へ御供致そ、サア御立なされ。サアサア師直め誤つて居る
ぞ。コリヤ爰な粹めく、粹様め」蓋イヤ若狹助最前から、ちと心悪うござる。マア先
へ」鯛何としたく腹痛か。コレサ伴内御背く。御藥進じよかな」蓋イヤく夫程に
も御座らぬ」鯛然らば少の内おくつろぎ。御前の首尾は我等がよい様に申上る。伴内一
間へ御供申せ」と、主従寄てお輦に、迷惑ながら若狹助、是はと思へど是非なくも、奥の
一間へ入れれば、「ア、もふ樂じや」と本藏は、天を拜し地を拜し、お次の間にぞ扣居る。
程もあらさず鹽冶判官、御前へ通る長廊下、師直呼かけ、「遅しく。何と心得て御座る。
今日は正七つ時と、先刻から申渡したでないか」判成程遅なはりしは不調法。去ながら、
御前へ出るはまだ間もあらんと、袂より文箱取出し、「最前手前の家來が、貴公へお渡し
申くれよ、則奥かほよ方より参りし」と、渡せば受取、鯛成程く、イヤ其元の御内賢
は扱々心懸が御座るは。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼と有、定て其事
ならん」と押抜き、「さなきだにおもきが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ねぞ。ハア
是は新古今の歌。此古歌に添削とは、ム、く」と思案の内、我戀の叶はぬ驗、扱は夫に

あやかり物―仕
合物

あちらの喧嘩―
若狭助と師直と
の諍

打明し、と思ふ怒をさあらぬ顔、「判官殿、此歌御覽じたで御座らふ」判「イヤ只今見まし
た」師「ム、手前が讀のを。ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ
歌が是じや。つまならぬつまな重ねそ、ア、貞女」。ア其元はあやかり物、登城も遅
なはる筈の事、内に計へばり付て御座るによつて、御前の方はお構ないじや」と、當こす
る雑言過言、あちらの喧嘩の門違とは、判官更に合點行ず、むつとせしが押鎖め、「ハ、
ハ、く是はく、師直殿には御酒機嫌か。御酒参つたの」師「何時盛らしやつた、イヤ
何時飲みました。御酒下されても呑いでも、勤る所は急度勤る。貴公は何故遅かつたの、
御酒参つたか。イヤ内にへばり付てござつたか。貴殿より若狭助殿、ア、格別勤られま
す。イヤ又其許の奥方は貞女といひ、御器量と申、手跡は見事、御自慢なされ。むつと
なされな虚言はないはさ。今日御前にはお取込、手前連も同然、其中へ鼻毛らしい、イ
ヤ是は手前が奥が歌でござる。夫程内が大切なら御出御無用。總躰貴様の様な、内に計
居る者を、井戸の鮎じやといふ譬が有、聞て置かしやれ。彼鮎めが僅三尺か四尺の井の
内を、天にも地にも無い様に思ふて、不斷外を見る事が無い。所に彼井戸がへに釣瓶に
付て上ります。夫を川へ放し遣ると、何が内に計居る奴じやによつて、悦んで途を失ひ、

橋杭で鼻を打て、即座にびりくくくくと死します。貴様も丁度鮎なづなと同じ事。ハ、ハ、ハ、と出放題でほうだい。判官腹にすへ兼かね、「こりやこなた狂氣召さつたか。イヤ氣が違ふたか師直もろちく」師し「シヤ此奴武士を執とらへて氣違きちがひとは、出頭第一の高師直かうのもろなほ」判はん「ム、すりや今の悪言あくごんは本性しやうよな」師し「くだい。又本性なりや如何いかする」判はん「チ、斯様かうする」と拔討ぬさちに、眞向まっこうへ切りつ、眉間みけんの大疵おほきず。是はと沈む身のかはし、烏帽子えぼしの頭二つに切、又切かゝるを脱けつ潜りつ、逡迴しゆんわいる折もあれ、お次に扣ひかへし本藏ほんざう走出はしりいでて押留おしどめめ、「コレ判官様御短慮ごんだんりよ」と、抱留いださむる其隙そのひまに師直もろなほは、館やかたをさしてこけつ轉まわびつ逡行しゆんぎやうは、「己おのれ師直眞二つ。放はなせ本藏放しやれ」とせり合内あふ、館やかたも俄に騒出さわだし、家中かちうの諸武士大名小名、押おさへて刀もぎ取とりや、師直もろなほを介抱かいほうやら、上を下へと三重立騒たちさわぐ。表御門裏御門兩方打たる館やかたの騒動、挑燈てうてん閃く大噪おほなぎ。早野勘平はやのかんぺい狼狽もうた眼、走歸はしりかへつて裏御門うらごもん、碎くだけよ破われよ、と打叩うちたたき大聲上おほこゑあけ、「鹽冶判官えんやはんぐわんの御内早野勘平みないのかんぺい。主人しゆじんの安否心あんひこころも元なし、爰明こゝあけて給たへ早くく」と呼よばはつたり。門内もんないよりも聲高々たかたか、「御用あらば表へ廻れ。爰は裏門うらもん」判はん「成程裏門合點なるほどうらもんがつてん。表御門は家中の大勢おほぜい、早馬はやばにて寄付よしかれず。喧嘩けんくわの様子は何とく」「喧嘩けんくわの次第相濟あひすんだ。出頭しゆつてうの師直様もろなほさまへ慮外りよぐわい致せし科しによつて、鹽冶判官えんやはんぐわんは閉門仰付へいもんおほせつけられ、網乗物えんやはんぐわんにてたつた今歸いまられし」と聞きより、ハア南無

在所―田舎

三寶、お屋敷へと走かゝつて、イヤ／＼／＼閉門ならば館へは猶歸られじ、と行つ戻りつ思案最中、婢、おかる道にてはぐれ、「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何とせうどふせう」と、取付敷くを取て突退、勤、エ、めろ／＼と吠頼、コリヤ勘平が武士は捨つたはやい。もふ是迄」と刀の柄、かる「コレ待て下され。こりや狼狽へてか勘平殿」勤、チヲうろたへた。是が狼狽ずに居られふか。主人一生懸命の場にも有合さず、剩、囚人同然の網乗物お屋敷は閉門、其家來は色に耽り御供に外れしと人中へ、兩腰指して出られふか。爰を放せ」かる「マ、ゝゝ、待て下さんせ。尤じや道理じやが、其狼狽武士には誰がした、皆わしが心から。死る道ならお前より、私が先へ死ねばならぬ。今お前が死だらば、誰が侍じやと譽まする。爰をとつくりと聞分て、私が親里へ一先來て下さんせ。父様も母様も在所でこそ有頼もしい人。もふかうなつた因果じや、と思ふて女房のいふ事も、聞て下され勘平殿」と、わつと計に泣沈む。勤、そふじや尤。そちは新參なれば委細の事は得知るまい。御家の執權大星由良助殿、未だ本國より歸られず。歸國を待てお詫せん。サア一時成共急がん」と、身拵へする所へ、鷺坂伴内家來引連駈出、雫ヤア勘平汝が主人判官、師直様へ慮外を働、かすり疵負し科によつて屋敷は閉門。追付首が飛は

一羽一伴内を鳥
と見立ていふ
ねぶかー蕨
まつかせーヨシ
牛ク

もんどりートン
ボカヘリ

ばちさばー斬殺
さば

知た事。サア腕廻せ連歸つてなぶり切。覺悟ひろけ」とひしめけば、「ヤアよい所へ鷺坂
伴内。己一羽で喰足ねど、勘平が腕の細ねぶか、料理鹽梅喰ふて見よ」「イヤ物ないは
すな家來共」「畏つた」と兩方より、「捕た」とかよるを、勘「まつかせ」と搔潛り、兩手に
兩腕捻上。はつしくと蹴返せば、替つて切込切先を、刀の鞘にて丁ど受、廻つて來る
を鐙と柄にて仰向に反し、四人一所に切かよるを、右と左へ一時に、でんがく返しにば
た／＼と打据へられ、皆散々に行跡へ伴内いらつて切かくる。引外しそつ首握り、
大地へどうどもんどり打せ、しつかと踏付、勘サアどふせうとこつちの儘、突ふか切ふ
かなぶり殺し」と、振上る刀に縋て、かる「コレ／＼其奴殺すとお詫の邪魔、もふよいわい
な」と留る間に、足の下をば／＼と、尻に尾のない鷺坂は、命から／＼迷て行。勘エ
エ残念／＼。去ながら、彼奴をばらさば不忠の不忠、一先夫婦が身を隠し、時節を待て
願ふて見ん」最早明六つ束がしらむ横雲に、塙を離れ飛鳥、かはい／＼の女夫連、道は
急けど跡へ引、主人の御身いかゞぞ、と案じ行こそ三重浮世なれ。

第 四

おしつちひーも
わづちひの誤な
るべし

鹽治判官閑居によつて、扇が谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉、家中の外は出入を止め、事嚴重に見へにけり。かよる折にも、花やかに奥は媚く女中の遊、御臺所かほよ御前、御傍には大星力彌、殿のお氣を慰めんと、鎌倉山の八重九重、色々櫻、花籠に、生らるゝ花よりも、生る人こそ花紅葉。柳の間の廊下を傳ひ、諸士頭原郷右衛門、跡に續いて斧九太夫、「是はく力彌殿早い御出仕」カイヤ某も國元より親共が參る迄、晝夜相詰罷在」原「それは御奇特千萬」と、郷右衛門兩手をつき、「今日殿の御機嫌は、如何お渡り遊ばさるゝ」と、申上ればかほよ御前、「チ、二人共太義く。此度は判官様お氣詰に思召し、おしつらひでも出よふかと、案じたとは格別、明暮築山の花盛御覽じて、御機嫌の能いお顔ばせ。それ故に、自もお慰に指上ふと、名有櫻を取寄て見遣る通の花拵へ」原「ア、いかに様にも仰の通、花は開く物なれば御門も開き、閉門を御赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何がなと存ずれど、斯様な事の思ひ付は、不重寶なる郷右衛門。ヤア肝心の事申上ん。今日御上使のお出と承はりしが、定て殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん。何と九太夫殿、そふは思召れぬか」カハハハ、コレ郷右衛門殿。此花といふ物も、當分人の目を悦ばす計、風が吹けば散失る。こなたの詞もまづ其ごとく、人の心を悦ばさふ逆、武士に

跡から元る云々
―上へのみの詔
はすぐに願はれ
る

惻惜―客番

似合ぬ、ぬらりくらりと跡から元る正月詞。なぜとおいやれ。此度殿の御越度は、饗應の御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ、館を騷せし科、輕うて流罪、重うて切腹。自體又師直公に敵對は、殿の御不覺」と聞も敢へず郷右衛門、「扱は其方、殿の流罪切腹を願はるよか」九イヤ願ひは致さねど、詞を飭らず眞實を申のじや。元をいへば郷右衛門殿、こなたの惻惜しはざから發た事。金銀を以て頼をはりめさるれば、簡様な事は出來申さぬ」と、己が心に引當て、欲面打消す郷右衛門、「人に媚詔ふは侍でない、武士でない。なふ力彌殿、何とそふでは有まいか」と、詞の角を宥むる御臺、「二人共に争ひ無用。今度夫の御難義なさる、元の發は此かほよ。日外鶴が岡で饗應の折柄、道しらすの師直、主の有自に無體な戀を云掛け、様々と口説きしが、恥を與へ懲させんと、判官様にも知らさず、歌の點に事寄、さよ衣の歌を書、恥ぢしめて遣つたれば、戀の叶はぬ意趣ばらしに判官様に惡口。元來短氣なお生れ付、え堪忍なされぬは、お道理でないかいの」と、語り給へば郷右衛門、力彌も俱に御主君の、御憤を察し入、心外面に顯はせり。「早御上使の御出」と、立關廣間ひしめけば、奥へ斯くと通じさせ、御臺所も座をさがり、三人出向ふ間もなく、入來る上使は石堂右馬之丞、師直が昵近樂師寺次郎左衛門

したが一併し

そべろくぞ

「役目なれば罷通る」と、會釋もなく上座に著ば、一間の内より鹽冶判官、徐々と立出、「是はく御上使と有て石堂殿御苦勞千萬、先御盃の用意せよ。御上使の趣承はり、いづれもと一獻酌、積鬱をはらし申さん」藥「ヲ、夫よりござろ、藥師寺もお間致さふ。したが上意を聞れたら、酒も咽へ通るまい」と、嘲笑へば右馬之丞、「我々今日、上使に立たる其趣、具に承知せられよ」と、懷中より御書取出し、押開けば判官も席を改め、承はる其文言、「此度鹽冶判官高定、私の宿意を以て、執事高師直を刃傷に及び、館を騷せし科によつて、國郡を沒收し、切腹申付る者也」聞よりはつと驚く御臺、竝居る諸士も顔見合せ、鞫果たる計なり。判官動する氣色もなく、「御上意の趣、委細承知仕る。扱是からは各の御苦勞休に、打寛いで御酒一つ」藥「コレく判官黙り召れ。其方が今度の科は、縛り首にも及ぶべき所、お上の慈悲を以て、切腹仰付らるゝを有がたう思ひ、早速用意もすべき筈。殊に以て切腹には定つた法の有物。夫に何ぞや、當世様の長羽織、ぞべらぞべらとしらるゝは、酒興か但血迷ふたか。上使に立たる石堂殿、此藥師寺へぶ作法」と、きめつくればにつこと笑ひ、「此判官酒興もせず血迷ひもせぬ。今日上使と聞よりも、斯あらんと期したる故、兼ての覺悟見すべし」と、大小羽織を脱捨れば、下には用意の白

小袖、無紋の上下死装束。皆々是はと驚けば、藥師寺は言句も出ず、顔膨らして閉口す。右馬之丞指寄て、「御心底察し入。則拙者檢視の役、心靜に御覺悟」判「ア、御深切 忝し。刃傷に及びしより、斯あらんとは兼ての覺悟。恨むらくは館にて、加古川本藏に抱留られ、師直を討洩し、無念骨髓に通つて忘がたし。湊川にて楠正成、最期の一念に依つて生を引といひしごとく、生替り死替り、鬱憤を晴さん」と、怒の聲と諸共に、お次の襖打叩き、一家中の者共、殿の御存生に御尊顔を拜したき願ひ、御前へ推參致さんや、郷右衛門殿お取次」と、家中の聲々聞ゆれば、郷右衛門御前に向ひ、「いかゞ計ひ候はん」判「フウ尤成願ひなれ共、由良助が參る迄無用く」原「はつ」と計一間に向ひ、「聞ると通の御意なれば、一人も叶はぬく」諸士は返す詞もなく、一間もひつそと靜まりける。力彌御意を承はり、兼て用意の腹切刀、御前に直すれば、心靜に肩衣取返座を寛け、判「コレく御檢使、御見届下さるべし」と、三方引寄九寸五分押戴き、「力彌々々」「ハア」「由良助は」カ「いまだ參上仕りませぬ」判「フウ、エ、存生に對面せで殘念。ハテ残り多やな。是非に及ばぬ是迄」と、刀逆手に取直し、弓手に突立引廻す。御臺二目と見も遣らず、口に稱名目に涙、廊下の襖踏開き、駈込む大星由良助、主君の有様見るよりも、「はつ」と

何程か下に本
望に存じます
杯の句を略す

計にどふど伏す。跡に續いて千崎矢間、其外の一家中、ばらくと駈入たり。判「由良助待兼たはよい」典「ハア御存生の御尊顔を拜し、身に取て何程か」判「ヲ、我も満足く」、定めて子細聞たであろ。エ、無念口惜いはよい」典「委細承知仕る。此期に及び申上る詞もなし。只御最期の尋常を願はしう存まする」判「ヲ、いふにや及ぶ」と諸手を懸け、くつくくと引廻し、苦しき息をほつとつき、「由良助此九寸五分は汝へ筐。我辭憤を晴させよ」と、切先にて氣管刎切、血刀投出し俯伏に、どうど轉び息絶れば、御臺を始並る家中、眼を閉ぢ息を詰、齒を喰しぱり扣ゆれば、由良助にじり寄、刀取上押戴き、血に染る切先を打守りく拳を握り、無念の涙はらくくく、判官の末期の一句、五臓六腑にしみ渡り、扱こそ末世に大星が、忠臣義心の名を上し、根ざしは斯としられけり。藥師寺は突立上り、「判官かくたばるからは早々屋敷を明渡せ」五「イヤさはいはれな藥師寺。いはど一國一城の主。ヤ旁、葬々の規式取賄ひ、心靜に立退れよ。此石堂は檢使の役目、切腹を見届たれば、此旨を言上せん。ナニ由良助殿、御愁傷察し入。用事あらば承はらん、必、心置れな」と、竝居る諸士に目禮し、悠々として立歸る。藥「此藥師寺も。死骸片付る其間、奥の間で休息せう。家來參れ」と呼出し、一家中共ががらくた道具、門前へほう

り出せ。判官が所持の道具、俄浪人にまけられな」と、館の四方を睨廻し、一間の内へ入にける。御臺は「わつ」と聲を上、「扱もく、武士の身の上程悲しい物の有べきか。今夫の御最期に、云たい事は山々なれど、未練なと御上使のさけしみが恥しさに、今迄堪へて居たわいの。いとをしの有様や」と、亡骸に抱付、前後も分かす泣給ふ。由良助も跡より追付、葬々の臺所、諸共亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良助も跡より追付、葬々の規式取行はん。堀矢間小寺間其外の一家中、道の警固致されよ」と、詞の下より御乗物、手舁に舁きすへ戸を開き、皆立寄て御死骸、涙と俱に載奉り、しづくと舁上れば、御臺所は正躰なく、歎給ふを慰めて、諸士の面々我一と、御乗物に引添く、御菩提所へと急行。人々御骸見送りて、座に著けば斧九太夫、「何大星殿、其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職。拙者連も其右には座せ共、今日より浪人となり、妻子を養育む術なし、殿の貯置給ふ御用金を配分し、早く屋敷を渡さずば、藥師寺殿へ無禮ならん」千イヤ千崎が存るには、指す敵の高師直、存命なるが我々が憤、討手を引受此館を枕として」定「ア、これく、討死とは悪い了簡。親九太夫の申さるゝ通屋敷を渡し、金銀を分て取が上分別」と、評義の中に由良助、默然として居たりしが、由良助の評定に、彌五郎の

順死—殉死

所存と、我胸中一致せり。いはゞ亡君の御爲に、我々順死すべき筈。むざ／＼と腹切ふより、足利の討手を待受、討死と一決せり」九「ヤア何と言はるゝ。能い評定かと思へば、浪人の瘦顔はり、足利殿に弓引ふ、ア、夫は無分別。マア此九太夫合點がいかぬ」一「チヲ親父殿そふじやく。此定九郎も其意を得ぬ。此談合には省いて貰はふ。長居は無益お歸りなされ」九「夫よかろいづれも緩りと居召され」と、親子召連立歸る。千「ヤア欲頼の斧親子、討死を聞怖して、逃歸つたる臆病者。彼奴構はずと大星殿、討手を待御用意御用意」一「ア、騷れな彌五郎。足利殿に何恨有て弓引べき。彼等親子が心底を、探らん爲の計略。薬師寺に屋敷を渡し、思ひ／＼に當所を立退、都山科にて再會し、胸中残さず打明て、評義をしめん」といふ間もあらせず。次郎左衛門一間を立出、「ハテベン／＼と長詮義。死骸片付たら、早く屋敷を明渡せ」と、いがみかゝれば郷右衛門、「ア、成程お待ち兼ね。亡君所持の御道具、其外の武具馬具迄、よく／＼改め請取られよ。サア由良助殿退散あれ」一「チ、心得たり」と、しづ／＼と立上り、御先祖代々、我々も代々、晝夜詰めたる館の内、今日を限りと思ふにぞ、名残惜氣に見返り／＼、御門外へ立出れば、御骸送り奉り、力彌矢間堀小寺追々に馳歸り、「扱は屋敷をお渡し有たか。此上は直義の討手

しめん—定めん

あやしー流し

鷹は死て云々
毛吹草に鷹は死
すれど縄をつま
ぐとあり
細道一細きにか
種が島一銀砲種
にするにかく
銀砲雨云々し
電だちでん震動雷

を引受討死せん」と、はやり立ば由良助、「イヤ／＼今死べき所にあらず。是を見よ旁」と、亡君の御筐を拔放し、「此切先には、我君の御血をあやし、御無念の魂を残されし九寸五分。此刀にて師直が、首搔切て本意を遂げん」「實尤」と諸武士の勇。屋敷の内に、は藥師寺次郎、門の貫の木はつしと立させ、「師直公の罰が當り、扱よいざま／＼」と、家來一度に手を叩き、咄と笑ふ閑の聲、「アレ聞れよ」と若侍、取て返すを山良助、「先君の御憤晴さんと思ふ所存はないか」はつと一度に立出しが、思へば無念と館の内を、振返り／＼、はつたと睨んで三重立出る。

第五

鷹は死ても穂は摘まずと、譬に洩す入月や、日數も積る山崎の、邊に近き侘住居、早の勘平若氣の誤り、世渡る望姓細道傳ひ、此山中の鹿猿を、打て商ふ種が島も、用意に持つや袂迄、鐵砲雨のしだらでん、誰水無月と白雨の、時間を爰にまつ陰。向ふより來る小挑灯、是も昔は弓張の、灯火消さじ濡さじと、合羽の裾に大雨を、凌ぎて急ぐ夜の道。「イヤ申々、率爾ながら火を一つ、御無心」と立寄ば、旅人もちやくと身構し、「ム、

此街道は無用心と、知て合點の一人旅。見れば飛道具の一口商、得こそは貸さじ出直せ」と、びくと動ば一討と、眼を配れば、勘「イヤア成程、盜賊とのお目違ひ御尤千萬。我等は此邊の獵人なるが、先程の大雨にはくちも濕り難義至極。サア鐵砲夫へお渡し申、自身に火を付御借」と、他事なき詞顏付を急度眺て、「和殿は早の勘平ならずや」勘「さいふ貴殿は千崎彌五郎」「是は堅固で」「御無事で」と、絶て久敷對面に、主人のお家没落の、胸に忘れぬ無念の思ひ、互に拳を握合。勘平は指俯向き暫し詞もなかりしが、「エ、面目もなき我身の上。古朋輩の貴殿にも、顔も得上ぬ此仕合、武士の冥加に盡たるか。殿判官公の御供先、お家の大事發りしは是非に及ばぬ我不運。其場にも有合せず、御屋敷へは歸られず、所詮時節を待て御詫と、思の外の御切腹。南無三寶、皆師直めがなす業、せめて冥途の御供と、刀に手は懸けたれど、何を手柄に御供と、どの頬さけて云譯せんと、心を碎く折から、密に様子を承はれば、由良殿御親子郷右衛門殿を始めとして、故殿の鬱憤散ぜん爲、寄々の思召立有との噂。我等連も御勘當の身といふでもなし、手がかり求め由良殿に對面逢け、御企の連判に御加へ下さらば、生々世々の面目、貴殿に逢も優曇花の、花を咲せて侍の、一分立て給はれかし。古傍輩の好武士の情、お頼申」と兩

手をつき、先非を悔し男泣、理せめて不便なる。彌五郎も傍輩の悔道理と思へ共、大事をむざと明さじと、「コレサ〜勘平。はて扱、お手前は身の云譯に取難せて、御企の、イヤ連判などとは何の謔言。左様の噂かつてなし。某は由良殿より郷右衛門殿へ急の使、先君の御廟所へ、御石牌を建立せんとの催し。併我々連も浪人の身の上、是こそ鹽治判官殿の御石塔と、末の世迄も人の口の端にかゝる物故、御用金を集る其御使、先君の御恩を思ふ人を撰出す爲、態と大事を明されず。先君の御恩を思はゞナ、台點か〜」と、石牌に擬へ大星の、工を餘所に知らせしは、實に傍輩の好なり。鷲ハア、忝い彌五郎殿。成程石牌といひ立、御用金の御拵ある事とづくに承はり及び、某も何とぞして用金を調へ、それを力に御詫と、心は千々に碎け共、彌五郎殿、恥しや主人の御罰で今此ざま、誰に斯との便もなし。され共かるが親、與市兵衛と申は頼母しい百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔歎き、何とぞして元の武士に立返れ、と翁嫗共に歎悲しむ。是幸御邊に逢し物語、段々の子細を語り、元の武士に立返ると云聞さば、纔の田地も我子の爲、何しにいなはるもいはじ。御用金を手がかりに、郷右衛門殿迄お取次、一入頼存」と、余義なき詞に、千ム、成程、然らば是より、郷右衛門殿迄、右の譯をも咄し、由

道は闇路一人の
親の心は闇にあ
らねども子を思
ふ道にまどひぬ
るかなの歌をと
る
白浪—強盜知ら
ずにかく
だん平物—大刀
ひたひちなか—
鏢錢半文

良殿へ願ふて見ん。明々日は、必急度御返事。則郷右衛門殿の旅宿の所書」と、渡せば
取て押戴、勲重々の御世話忝し。何とぞ急に御用金を拵へ、明々日お目にかよらん某
が有家お尋あらば、此山崎の涉場を左へ取、與市兵衛とお尋有ば、早速相知れ申べし。夜
更けぬ内に早くも御出。コレ此行先は猶物騒、随分ぬかるな」千合點々々。石牌成就する
迄は、蚤にもくはさぬ此體。御邊も堅固で、御用金の便を待て。さらば」勲さらば」と兩方
へ、立別れてぞ急ぎ行。又も降來る雨の足、人の足音とほくと、道は闇路に迷はねど、子
故の闇につく杖も、直成心堅親仁。一筋道の後から、「ヲ、イ、親仁殿、よい道連」と
呼はつて、斧九太夫が躬定九郎、身の置所白浪や、此街道の夜働、だん平物を落指、足さ
つきにから呼聲が、貴様の耳へは這入らぬか。此物騒な街道を、能い年をして大膽く
連に成ふ」と向ふへ廻り、きよろ付目玉ぞつとせしが遣は老人、「是はくお若いに似ぬ
御奇特な。私もよい年をして、一人旅はいやなれど。サアいづくの浦でも金程大切な物
はない。去年の年貢に詰り、此中から一家中の在所へ無心にいたれば、是もびたひらな
か才覺ならず、埒の明ぬ所に長居はならず、すごく一人戻る道」と、半分いはさず、
定「ヤイ喧ましい。有様が年貢の納らぬ其相談を聞には來ぬ。コレ親仁殿、おれがいふ事

有格—普通にあ
う事

跡の在所—前の
村

とくと聞しやれや、マア、斯じやは。こなたの懐に金なら四五拾兩の嵩、島の財布に有のを、とつくりと見付て來たのじや。借して下され、男が手を合す。定て貴様も何ぞ詰らぬ事か、子が難義に及ぶによつてといふ様な、有格な事じやあるけれど、おれが見込んだら、ハテしよ事がないと諦て、借して下され」と、懷へ手を指入、引ずり出す島の財布。與「ア申し夫は」一「夫はとは。是程爰に有物」と、引たくる手に縋り付、「イエ／＼此財布は跡の在所で草鞋買込、端錢を出しましたが、跡に残るは晝食の握飯、霍亂せん様にと娘がくれた和中散、反魂丹でござります。お赦しなされて下さりませ」とひつたくり、逆行先へ立廻り、定エ、聞分のない。むごい料理をするがいやさに、手ぬるういへば付上る。サア其金爰へ蒔出せ。遅いとたつた一討」と、二尺八寸拜打、與「なふ悲しや」といふ間もなく、から竹割と切付る、刀の廻りか手の廻りか、はづれる拔身を兩手にしつかと攔付、「どふでもこなた殺さしやるの」一「チ、知た事。金の有のを見てする仕事、小言吐かずとくたばれ」と、肝先へ指付れば、與「マ、マ、マア待て下さりませ。ハア是非に及ばぬ、成程／＼、是は金でござります。けれども此金は、私がたつた一人の娘がござら、其娘が命にも替へぬ、大事の男がござりまする、其男の爲に入金。ちと譯有事故浪人し

しがく才覺

まつととこほへ
もつと泣けり

て居まする。娘が申まするは、あのお人の浪人も元はわし故、何とぞして元の武士にし
て進ぜたいく、と嘯とわしとへ毎夜さ頼。ア身貧にはござりまする、どうもしがくの
仕様もなく、婆というく談合して、娘にも吞込ませ、掣へは必沙汰なしと謀合せ、本
にく親子三人が血の流れる金。夫をお前に取れて、娘は何と成ませう。コレ拜ま
す助て下されませ。お前もお侍の果そふなが、武士は相身互。此金がなければ、娘も掣
も人様に顔が出されぬ。たつた一人の娘に連添掣じや物、不便にござる、かはいござる。了
簡してお助なされて下さりませ。エ、お前はお若いによつてまだお子もござるまいが、や
んがてお子を持て御覧じませ、親仁が云居つたは尤じやと思召て、此場を助さしやつて
下さりませ。マア一里行は、私に在所。金を掣に渡してから殺されましょ。申々娘が悦
ぶ顔見てから死たうござります。コレ申、ア、あれくく」と呼はれど、跡先遠く山彦
の、何に哀催せり。定チ、悲しいこつちやは、まつととこほへ。ヤイ耆め、其金でおれが
出世すりや、其恵でうぬが躬も出世するはやい。人に慈悲すりや悪うは報はぬ。ア、か
はいや」とぐつと突く。「うん」と手足の七顛八倒、のたくり廻るを脚にて蹴返し、「チ、
いとしゃ、痛かるけれどおれに恨はないぞや。金がありやこそ殺せ、金が無けりや何の

いの。金が敵じやいとしほや。南無阿彌陀、南無妙法蓮花經、何方へ成とうせおろ」と、刀も抜かぬ半ざし決り、草葉も朱に置露や、年も六十四苦八苦、あへなく息は絶にけり。仕濟したりと件の財布、暗がり耳の捌讀、写ヒヤ五拾兩。エ、久しぶりの御對面、忝し」と首に引かけ、死駭を直に谷底へ、刎込蹴込泥まぶれ、反は我身にかゝる共、しらず立たる後より、逸散に來る手負猪。一是はならぬ」と身をよぎる。驅來る猪は一文、木の根岩角踏立蹴立、鼻いからして泥も草木も一捲に飛行ば、あはやと見送る定九郎が、背骨へ掛けてどつさりと、肋へ抜ける二つ玉、うん共ぎやつ共いふ間なく、ふすほり返りて死たるは、心地よくこそ見へにけれ。猪打留めしと勘平は、鐵砲提爰彼處、探り廻りて扱こそと、引立れば猪にはあらず。勘ヤア／＼こりや人じや。南無三寶、仕損じたり」と思へど闇き眞の闇、誰人なるぞと問れもせず、まだ息あらんと抱起せば、手に當る金財布、掴んで見れば四五拾兩。天の與と押戴き／＼、猪より先へ逸散に、飛がごとくに、三重急ぎける。

第六

みさき踊ししゆ
んだるは最中の
意ばくんは婆
埴生一見苦しき
あかつき一垢付
にかく
ゆふ一結ふと云
ふ

おとまししい
やらしい
と様云々一夫出
て見よ喚連れて

歌みさき踊がしゆんだる程に、親仁出て見やばよんつ、ばよんつれて親仁出て見やばよんつ。麥かつ音の在郷歌、所も名に負ふ山崎の小百姓、與市兵衛が埴生の住家、今は早の勘平が、浪々の身の隠里。女房おかるは寐亂れし、髪取上んと櫛箱の、あかつき掛けて戻らぬ夫、待間も解けし投島田、ゆふにいはいれぬ身の上を、誰にかつけの水櫛に、髪の色艶梳きかへし、品好くしやんと結立しは、在所に惜き姿なり。母の齡も杖つきの、野道とほく立歸り、母ヲ、娘髪結やつたか。美しう能う出來た。イヤもう在所はどこもかも、麥秋時分でいそがしい。今も藪際で若い衆が麥かつ歌に、親仁出て見やばよんつれてと歌ふを聞、親仁殿の遅いが氣にかより、在口迄往たれどようなふ影も形も見へぬ」か「サイナこりやまあどふして遅い事じや。わし一走見て來やんしよ」母「イヤなふ若い女の一人あるくはいらぬ事。殊に其方は小い時から、在所をあるく事さへ嫌ひで、鹽治様へ御奉公に遣つたれど、どふでも草深い所に縁が有やら戻りやつたが、勘平殿と二人人居やればおとましい顔も出ぬ」か「ヲ、母様のそりや知た事。好いた男と添のじや物、在所はおろか貧しい暮でも苦にならぬ。やんがて盆に成て、と様出て見やかよんつ、かかんつれてといふ歌の通り、勘平殿とたつた二人、踊見に往きやんしよ。お前も若い時

指合くらぬ云々
親の前も憚ら
ぬがらゝした
娘

兄一寺岡平右衛
門

梶ておいへ云々
おいへは團圓
裏のあふ廣間始
人は藝なき妓に
て描くにかく
めんよふ一不
思議
玉殿一狐

借一貫の意

いちぬ物一よ
からぬ

覺おぼえがある」と、指合さしあひくらぬぐはら娘むすめ、氣もわさくくと見へにける。母はは「何ほ其様に面白可おもしろをか笑う云やつても、心の中はの」かる「イエー濟すんでござんす。主ぬしの爲に祇園町へ、勤奉公きんほうこうに行は、兼かへて覺悟かくごの前なれど、年寄としよつて爺様おやさまの世話せわやかしやんすが」母はは「そりや云やんな。少せう身者しんものなれど、兄あにも鹽冶様えんやさまの御家來ごけらいなれば、外ほかの世話せわする様やうにもない」と、親子咄はなしの中なか道傳みちづたひ、駕かを昇かがせて急來いそぎるは、祇園町ぎげんまちの「文字屋いちもんじや」「爰こゝじやく」と門口かどぐちから、「與市兵衛殿内みちのうちににか」と、言いつゝ這入はいれば、母はは「是はマアく遠い所を。ソレ娘むすめ煙草盆たばこぼんお茶上ちやあふましや」と親子して、梶つちでおいへを始人屋はくじんやの亭主ていしゆ、「扱夕部けつやべは是の親仁殿おやぢのもいかる太義たいぎ。別條無べつじやうなう戻もどりましたか」母はは「エ、扱おやぢは親仁殿おやぢのと連立つれたつて來はなされませぬか」文字もじ「是はしたり」母はは「お前へ往いてから今において」文字もじ「ヤア戻もどられぬか、ハテめんよふな。ハア若稻荷前もしいなりまへをぶら付つて、彼玉殿かのたまごのにつまよりやせぬかの。コレ此中爰このちうへ見に來て極きはめた通とほりお娘むすめの年いも丸五年切ごんやごう、給銀きふぎんは金百兩きんひやくりやう、さらりと手を打うた。是の親仁おやぢがいはるとには、今夜中こんやごうに渡さねばならぬ金有かねあれば、今晚證文こんはんしやうもんを認め、百兩ひやくりやうの金子きんすお借かしなされて下され、と涙なみだをこぼしての頼故たのみゆゑ、證文しやうもんの上で半金渡はんきんし、残りのこりは奉公人ほうこうにんと引替ひきかへの契約けいやく。何が其五拾兩渡りやうわたすと悦よろこんで戴いたき、ほたくいふて戻もどられたは、もふ四つでも有あふかい。夜道よみちを一人金持ひとりかねもちていらぬ物、

れこ—これ丈

號—許嫁

と留ても聞ず、戻られたが、但は道に」「かゝる」イエ／＼寄しやる所は。なふかよさん」母無
い共／＼。殊に一時も早うそなたや私に金見せて、悦ばさふ迎いきせきと、戻らしやる
筈じやに合點がいかね」「文字」イヤこれ合點のいくいかねは其方の穿鑿、こちはさがりの
金渡して、奉公人連れて往の」と、懷より金取出し、「跡金の五拾兩、是で都合百兩、サア渡
す受取しやれ」母「お前夫でも親仁殿の戻らぬ中は、なふかる、わが身は遣られぬ」「文字」ハ
テぐす／＼と埒の明ぬ。コレぐつ共すつ共、云はれぬ與市兵衛の印形、證文が物いふ。今
日から金で買切た體、一日違へばれこ宛違ふ。どふでかふせざ濟まい」と、手を取て引
立つ。「マア／＼待て」と取付母親突退勿退、無體に駕へ押込／＼昇上る門の口、鐵砲に
蕘笠打かけ、戻りかゝつて見る勘平、つか／＼と内に入、勳、駕籠の内なは女房共。こり
やマアどこへ」「チ、勘平殿よい所へよう戻つて下さつた」と、母の悦び其意を得ず、「ど
ふでも深い譯がある。母者人女房共、様子聞ふ」と、おいゑの真中、どつかと座れば文
字の亭主、「チウ扱はこなたが奉公人の御亭じやの。譬夫でも何でも、號の夫などと、脇
より違亂妨申者無之候、と親仁の印形有からは、此方には構はぬ。早う奉公人を受
取ふ」母「チ、聲殿合點が行まい。兼てこなたに金の入様子、娘の咄で聞た故、どふぞ調

へて進しんぜたい といふた計はかりで一錢せんの宛あてもなし。そこで親仁殿おやぢののいはしやるには、ひよつと此方こなたの氣きに、女房にようほう賣うて金調かねさとのよう、とよもや思おもふてでは有あるまいけれど、若兩親もしふたおやの手前てまへを遠慮えんりよして、居ゐやしやるまい物ものでもない、いつそ此與市兵衛よいちべゑが、聲殿せいのにしらす娘むすめを賣うふ、まさかの時は切取きりとりするも侍さむらいのならひ、女房賣にようほううても恥はぢにはならぬ、お主しうの益やくに立たてる金かね、調てうへておましたら、まんざら腹はらも立たつまいと、昨日きのふから祇園町ぎゐんまちへ折極せききはめに往いて、今いまに戻もどりしやれぬ故ゆゑ、親子案おやこあんじて居ゐる中なかつへ、親方殿おやかたのが見みへて、夕部親仁殿ゆうべおやぢのに半金渡はんきんわし、跡金あとがねの五拾兩ごじゅうりやうと引替ひきかへに、娘むすめを連つれて往いのふといふてなれど、親仁殿おやぢのに逢あつての上うへと、譯わけをいふても聞入きこいれず、今連つれて往いなしやる所ところ、どふせうぞ勘平殿かんぺいの、勘是かんぜはく先さき以もつて舅殿しうじのの心遣こころづひ忝かたじけない。したがこちにもちつと能よい事ことがあれ共ども、夫それは追おつて。親父殿おやぢのも戻もどられぬに、女房共おんなどもは渡わされまい」文字もんじとはなぜに」勘ハテいはど親おやなり判はかりあかり。尤もつとも夕部半金ゆうべはんきんの五拾兩渡ごじゅうりやうされたても有あふけれど」文字もんじイヤこれ京大阪きやうおほさかを僕またに懸かけ、女護島程奉公人にようごしまを抱かかへ一文字屋もんじや。渡わさぬ金かねを渡わしたと、いふて濟物すじものかいの。まだ其上そのうへに慥たしかな事ことが有あるてや。是これの親仁おやぢが彼五拾兩かのといふ金かねを、手拭てぬぐひにぐるぐと巻まいて懷ふところに入いれらるゝと、そりやあぶない、是これに入いれて首くびに懸かけさつしやれと、おれが著きて居ゐる此一重物ひとへものの、島しまの切きで拵こしらへた金財布かねざいふかし借かしたれば、やんがて首くび

とやーさやう

七度尋ねて云々
一語、妄りに人
を疑ふ勿れの意
でんと沙汰―お
上沙汰

にかけて戻られう」勤「ヤア何と、こなたが著て居る、此島の切の金財布か」文字「チ、てや」勤「あの此島でや」文字「何と慥な證據で有ふが」聞よりはつと勘平が、肝先にひしとこたへ、傍邊に目を配、袂の財布見合せば、寸分違はぬ糸入島、「南無三寶、扱は夕部鐵砲で、打殺したは舅で有たか。ハアはつ」と我胸板を二つ玉で、打抜かるより切なき思ひ、とはしらずして女房、「コレこちの人そはくせすと、遣る物かやらぬ物か、分別して下さんせ」勤「チ、成程、ハテもふあの様に慥にいはるゝからは、往きやらすば成まいか」かる「アノとつ様に逢いでもかへ」勤「イヤく親仁殿にも今朝一寸逢たが、戻は知まい」かる「フウそんなりや、父様に逢てかへ。夫ならそふと云もせで、母様にも私にも案じさしてばつかり」と、いふに文字も圖に乗て、「七度尋て人疑へじや。親仁の有所の知れたので、そつちもこつちも心がよい。まだ此上にも四の五の有ば、いや共にでんと沙汰。マアくさらりと濟でめでたい。お袋も御亭も六條参りして少寄しやれ。サアサア駕に早う乗りや」かる「アイくこれ勘平殿もふ今彼地へ行ぞへ。年寄た二人の親達、どふでこな様の皆世話。取別て父様はきつい持病、氣を付て下さんせ」と、親の死目を露路しらず、頼む不便さいぢらしさ。勤「いつそ打明有の儘、咄さんにも他人有」と、心を痛め

こたへ居る。母ヲ、掣殿、夫婦の別れ暇乞がしたかるけれど、そなたに未練な氣も出よ
かと思ふての事である」か「イエー、なんほ別れても、主の爲に身を賣ば、悲しうも
何共ない。わしや勇んで行母様、したが父様に逢ずに行のが」母ヲ、夫も戻らしやつた
ら、つる逢に往かしやろぞいの。煩はぬ様に炙すへて、息災な顔見せに来てたも。鼻紙
扇もなけりや不自由な。何にもよいか、とばつて怪我仕やんな」と、駕に乗迄心を付
かる「さらばや」母さらば、何の因果で人並な娘を持、此悲しいめを見る事じや」と、齒
を喰しぱり泣ければ、娘は駕にしがみ付、泣をしらさじ聞さじと、聲をも立す咽せかへ
る。情なくも駕昇上、道をはやめて急行。母は跡を見送りく、「ア、由ない事いふて、
娘も嘸悲しかろ。ヲ、こな人わいの、親の身でさへ思ひ切がよいに、女房の事ぐづく
思ふて、煩うて下さんな。此親仁殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふ。こなた逢たといは
しやつたの」勘ア、成程「母そりやマアどこらで逢しやつて、何處へ別れて往かしやつ
た」勘されば別れた其所は、鳥羽か伏見か淀竹田」と、口から出次第滅法彌八、種が島の
六狸の角兵衛、所の狩人三人連、親仁の死骸に葦打著せて、戸板に乗どやくと内に入
る。夜山仕舞て戻りがけ、是の親仁が殺されて居られた故、狩人仲間が連て來た」と、聞よ

笑止―氣の毒

わごりよ―和御
察にて手前とい
ふに同じ
くすね―密に探
め取る

りはつと驚く母。「何者の所爲。コレ聲殿、殺した奴は何者じや。敵を取て下されのふ。コレ親仁殿く」と呼べど叫べど其甲斐も、泣より外の事ぞなき。狩人共口々に、「テ、お袋悲しかる。代官所へ願ふて詮義して貰はしやれ。笑止く」と打連て、皆々我家へ立歸る。母は涙の隙よりも、勘平が傍へ指寄て、「コレ聲殿、よもやくくくく」と思へ共合點がいかぬ。なんほ以前が武士じや辻、舅の死目見やしやつたら、悔りも仕やる筈。こなた道で逢た時、金受取はさつしやれぬか。親父殿が何といはれた。サアいはつしやれ、サア何と。どふも返事は有まいがの。無い證據はコレ爰に」と、勘平が懐へ手を入て引出すは、「さつきにちらりと見て置た此財布。コレ血の付て有からは、こなたが親仁を殺したの」勘「イヤ夫は」母「夫とは。エ、わごりよはなふ、隠しても隠されぬ、天道様が明らかな。親仁殿を殺して取た、其金にや誰遣る金じや。ムウ聞へた、身貧な舅、娘を賣た其金を、中で半分くすねて置て、皆遣るまいかと思ふて、コリヤ殺して取たのじやな。今といふ今迄も、律義な人じやと思ふて、欺されたが腹が立はいや。エエ爰な人でなし、あんまり鞠て涙さへ出ぬはいや。なふいとしや與市兵衛殿、畜生の様な聲とは知らず、どふぞ元の侍にして遣りたいと、年寄て夜も寐ずに、京三界を駈

事じや迄—迄は
強辭にて意なし

五體—頭と兩手
兩足

腰ふさぎ—間に
あはせの刀

歩き、珍財を投打て、世話さしやつたも却てこなたの身の怨と成たるか。飼かふ犬に手
をくはるよと、ようもく此様に酷たらしう殺された事じや迄。コリや爰な鬼よ蛇よ、
父様を返せ、親父殿を生て戻せやいと、遠慮會釋や荒男の、鬘を掴んで引寄く擲付、
「づたくに切さいなんだ逆、是で何の腹がるよ」と、恨の数々口説き立、かつぱと伏し
て泣居たる。身の誤りに勘平も、五體に熱湯の汗を流し、壁に喰付天罰と思ひ知たる折
こそあれ、深編笠の侍二人、「早の勘平在宿を仕召るか。原郷右衛門千崎彌五郎、御意
得たし」と音なへば、折悪けれ共勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出迎ひ、「コレハく御兩所
共に、見苦しき埴屋へ御出忝し」と、頭を下れば郷右衛門、「見れば家内に取込も有そう
な」勤イヤもう瑣細な内證事。お構なく共いざ先あれへ」居然らば左様に致さん」と、す
つと通り座に著けば、二人が前に兩手をつき、勤此度殿の御大事にはづれたるは、拙者
が重々の誤り、申開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中
諸共相勤る様に、御兩所の御執成、偏に頼奉る」と、身をへり下り述べれば、郷右衛門
取あへず、「先以其方貯なき浪人の身として、多くの金子、御石牌料に調進せられし段、
由良助殿甚だ感じ入れしが、石牌を營むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせし其方の

湯しても云々
湯不飲盜泉之
が熱不忌惡木
之藤(文選)

金子を以て、御石牌料に用ひられんは、御尊靈の御心にも叶ふまじと有て、金子は封の儘相戻さる」と、詞の中より彌五郎懷中より金取出し、勘平が前に指置は、はつと計に氣も轉動、母は涙と諸共に、「コリヤ爰な惡人づら。今といふ今親の罰、思ひしつたか。皆様も聞て下され、親仁殿が年寄て後生の事は思はず、聲の爲に娘を賣、金調へて戻らしやるを、待伏せして、あの様に殺して取た金じや物、天道様がなくばしらず、何で御用に立物ぞ。親殺しのいき盜人に、罰を當て下されぬは、神や佛も聞へぬ。あの不孝者、お前方の手に懸けて、なぶり殺しにして下され、わしや腹が立はいの」と、身を投ふして泣居たる。聞に驚き兩人刀追取り、弓手馬手に詰懸けく、彌五郎聲をあらよけ、「ヤイ勘平、非義非道の金取て、身の科の詫せよとは云ぬぞよ。わがやうな人非人、武士の道は耳に入まい。親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は、大身槍の田樂刺、拙者が手料理振舞はん」と、はつたと睨めば郷右衛門、「渴しても盜泉の水を吞ずとは義者の誠、舅を殺し取たる金、亡君の御用金に成べきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察有て、突戻されたる山良助の眼力、天晴々々。さりながら、ハア情なきは此事世上に流布有て、鹽冶判官の家來早の勘平、非義非道を行ひしといはど、汝計が恥ならず、

亡君の御恥辱と知らざるか。睦者。左程の事の辨なき汝にてはなかりしが、如何なる天魔が見入し」と、鋭眼に涙を浮め、事をわけ理をせむれば、たまり兼て勘平、諸肌押脱ぎ脇指を、抜くより早く腹にぐつと突立、「ア、いづれもの手前面目もなき仕合。拙者が望叶はぬ時は、切腹と兼ての覺悟、我舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあれば、一通り申ひらん。兩人共に聞て給へ。夜前彌五郎殿の御目に懸り、別れて歸る闇紛れ、山越猪に出合、二つ玉にて打留、駈寄て探見れば、猪にはあらで旅人。南無三寶過たり、藥はなきかと懷中を捜し見れば、財布に入たる此金。道ならぬ事なれ共、天より我に與ふる金と、直に馳行彌五郎殿に彼金を渡し、立歸つて様子を聞ば、打留たるは我舅、金は女房を賣た金。斯程迄する事なす事、鵲の背ほど違ふといふも、武運に盡たる勘平が、身の成行推量有」と、血走眼に無念の涙。子細を聞より、彌五郎ずんど立上り、死駈引上打返し、彌ムウく」と疵口改め、「郷右衛門は見られよ。鐵砲疵に似たれども、是は刀で抉つた疵。エ、勘平早まりし」と、いふに手負も見て悔り、母も驚く計なり。郷右衛門心付、「イヤコレ千崎殿、ア、是にて思ひ當つたり。御自分も見られし通、是へ來る道端に、鐵砲受たる旅人の死骸、立寄見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘當したる

一劫——功

悪党者、身のイなき故に、山賊すると聞たるが、疑もなく勘平が、舅を討たは彼奴が業」母「エ、そんなりや、あの親仁殿を殺したは、外の者でござりまするかへ。ハアはつ」と母は手負に縋り、「コレ手を合して拜みます。年寄の愚痴な心から恨いうたも皆誤り。こらへて下され勘平殿。必死で下さるな」と泣詫れば顔ふり上、舅「只今母の疑も、我悪名も晴たれば、是を冥途の思出とし、跡より追付舅殿、死出三途を伴はん」と、突込刀引廻せば、舅「ア、暫く」。思はずも其方が舅の敵討たるは、いまだ武運に盡ざる所。弓矢神の御患にて、一劫立てたる勘平。息ある中に郷右衛門が密に見する物有」と、懷中より一卷を取り出し、さらりと押ひらき、「此度亡君の敵、高師直を討取んと神文を取かはし、一味徒黨の連判かくの如し」と、讀も終らず苦痛の勘平、「其姓名は誰々成ぞや」舅「ヨ、徒黨の人数は四十五人。汝が心底見届たれば、其方を指加へ、一味の義士四十六人。是を冥途の土産にせよ」と、懷中の矢立取出し姓名を書記し、「勘平血判」舅「心得たり」と、腹十文字に搔切、臍腑を掴でしつかと押、「サア血判仕つた。ア、忝や、有がたや、我望達したり、母人歎いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬ此金、一味徒黨の御用金」と、いふに母も涙ながら、財布と俱に二包二人が前に指出し、母「勘平殿の魂

紫摩黄金—黄金
の紫色を帯ひた
るもの、黄金中
の最上とせられ
たり

聲をはかり—聲
の出る限り

の入た此財布、せきぎの 鞆殿じよと思ふて、敵討の御供に、連てござつて下さりませ」原「チ、成程尤なり」と、郷右衛門金取納め、「思へば、此金は島の財布の紫摩黄金、佛果を得よ」といひければ、勘平、佛果とは穢はし、死ぬ。魂魄此土に留つて、敵討の御供する」と、いふ聲も早四苦八苦、母は涙に搔暮れながら、「ナフ勘平殿、此事を娘にしらし、せめて死目に逢してやりたい」勘平「親の最期は格別、勘平が死だ事必知らしめて下さるな。お主の爲に賣たる女房、此事聞て不奉公せば、お主に不忠するも同然。只其儘に指置れよ。サア思ひ置事なし」と、刀の鋒咽にぐつと指貫き、かつばと伏して息絶たり。母「ヤアもふ鞆殿は死しやつたか。扱も、世の中に、おれが様な因果な者が又と一人有るか、親仁殿は死しやる、頼に思ふ聲を先立、いとしかはいの娘には生別れ、年寄た此母が一人残つて是がマア、何と生て居られうぞ。コレ親仁殿與市兵衛殿、おれも一所に連て往て下され」と、取付ては泣叫び、又立上つて「コレ鞆殿、母も俱に」と縋付ては伏沈み、あちらでは泣、こちらでは泣、わつと計にどふど伏、聲をはかりに歎しは、目も當られぬ次第なり。郷右衛門突立上り、「ヤアこれ、老母、歎るゝは理りなれ共、勘平が最期の様子、大星殿に委語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたる

此金は、（じきん） 聾（ろう）と舅（きう）の七七（ななとせ）日、四十九（しじゅうにち）日や五十兩、合（あはせ）て百兩百（ひゃくりやうひゃく）ヶ日の追善供養、跡懇（あとこん）に弔（さぶら）はれよ。さらば（さ）く」母（はは）おさらば」と、見送（みおく）る涙、見返（みかへ）る涙、涙の浪の立返（なみのたちかへ）る、人（ひと）もはかな
き 三重

第七

西方云々極樂
は西にあるとい
ふより彌陀に續
けたり
はくー白人
けうといーすば
らし

下に置れぬー大
切に饗す時にい
ふ

歌花に遊（あそ）ばと祇園邊（ぎゐんべ）の色揃（いろそろ）へ、東方南方北方西方、彌陀（みだ）の淨土（じやうど）がぬりに塗立（ぬりたて）、ぴつかり
ぴか（ひか）く、光り輝（かがや）くはくや藝子（けいこ）に、いかな粹奴（すみめ）も現（う）ぬがして、愚鈍（ぐどん）どろつくどろつくや、
ワイワイノ 九誰（たそだのま）頼（たの）ふ、亭主（ていしゆ）は居（ゐ）ぬか。亭主々々（ていしゆ々々） 亭（てい）是（し）はいそがしいは、何奴様（なんがさま）じや。何
方様（たさま）じや。エ斧（をの）九太様、御案内（ごあんない）とはけうといけうとい 九イヤ初（はじめ）てのお方を同道申（どうだうまうし）た。
きつう取込（とりこみ）そふに見（み）へるが、一つ止（あひ）ます座敷（ざしき）が有（あ）か 亭御座（ござ）ります共。今晚（こんばん）は彼由良大
盡（じん）の御趣向（ごしゆかう）で、名有色達（あなあるたち）を掴（つか）込み、下座敷（したざしき）は塞（ふさ）がつてござりますれど、亭座敷（ちんざしき）が明（あ）て
ざります 九そりや又蜘蛛（くも）の巢（す）だらけで有（あ）ふ 亭又惡口（わるぐち）を 九イヤサよい年（とし）をして、女郎
の蜘蛛（くも）の巢（す）にかゝらまい用心 亭コリヤきつい。下に置（お）かれぬ二階座敷（かいざしき）、ソレ灯（ひ）を點（とも）せ中
居共、お盃（さかづき）お烟草盆（たばこぼん）と、高い調子（てうし）に枷（かせ）かけて、奥（おく）は騒（さわ）ぎの太鼓三味、九ナント件内殿（はんないどの）、由

指合くちぬ一親
子一つに出くは
さぬ

いかるつや一太
きな口前

良助が體御覽じたか」伴九太夫殿、ありやいつそ氣違でござる。段々貴様より御内通
有ても、あれ程に有ふとは、主人師直も存ぜず、拙者に罷登て見届、心得ぬ事あらば、早
速にしらせよと申付ましたが、扱々々我もへんしも折ましてござる。勅力彌めは何と致
したな」九此奴も折節此所へ参り俱に放埒、指合くらぬが不思議の一つ。今晚は底の底
を捜見んと、心工を致して参つた。密々にお咄し申そふ。いざ二階へ」伴先々」九然ら
ば斯うお出で」歌實は心に思ひはせいで、あだな惚れたくの口先は、いかるつやでは
有はいな。土彌五郎殿、喜多八殿、是が由良助殿の遊び茶屋、一力と申のでござる。コ
レサ平右衛門、よい時分に呼出そふ。勝手に扣へてお居やれ」平畏りました。宜しう
頼上ます」土誰ぞちよと頼たい」仲屋アイくどな様じやへ」土イヤ我々は由良殿に、
用事有て参つた。奥へ往て云ふには、矢間十太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八でござる。
此間より節々迎の人を遣はしますれ共、お歸りのない故、三人連で参りました。ちと御
相談申さねばならぬ義がござる程に、お逢なされて下され、と急度申てくれ」仲夫は何
とも氣の毒でござんす。由良様は三日以來香續、お逢なされてからたはるは有まい。本
性はないぞへ」土ハテ扱まあそふ云ふておくりやれ」仲アイく」喜彌五郎殿お聞なさ

れたか」彌承はつて驚入りました。初の程は敵へ聞する計略と存じましたが、いかふ遊に實が入過まして、合點が參らぬ」彌何と此喜多八が申た通、魂が入代つてござらふがの。いつそ一間へ踏込」土イヤくくとくと面談致した上」彌成程、然らば是に待ませふ」仲手の鳴方へくく」典捕まよく」仲由良鬼やまたい」典捕まへて酒吞そ酒吞そ。コリヤとらまへたは、サア酒々、鉚子持く」土イヤコレ由良助殿。矢間十太郎でござる。こりや何と成さるゝ」典南無三寶仕舞た」仲オ、氣の毒。何と榮さん、ふしくた様なお侍様方、お連様かいな」彌さあれば、お三人共怖い顔して」土イヤコレ女郎達、我々は太星殿に用事有て參つた、暫く座を立て貰たい」仲其様な事で有そな物。由良様奥へ行ぞへ。お前も早うお出、皆様是にへ」土由良助殿、矢間十太郎でござる」喜「竹森喜多八でござる」彌千崎彌五郎御意得に參つた。お目覺されませう」典是は打揃ふてよふお出なされた。何と思つて」土鎌倉へ打立時候はいつ比でござるな」典さればこそ、大事の事をお尋なれ、丹波與作が歌に、歌江戸三界へいかんして。ハ、ハ、ハ、御免候へ、たはいく」三人ヤア酒の酔本性違はず。性根が付すば三人が、酒の酔を醒させうかな」平ヤレ聊爾なされまするな。憚ながら平右衛門めが、一言申上たい義が

江戸三界へ云々
近松の丹波與
作の中に此歌出
てたり其下に
つ戻らんす事
ややら殺して置
て行かんせの云
々とあり

ういやつ一殊勝者
みたくしーわた
くしの詠か
あぢな事の一
面
白い事だが

ござります。暫く御扣下されませう。由良助様、寺岡平右衛門めでござります、御機嫌の體を拜しまして、いか計大悦に存奉ります」典「フウ寺岡平右とは、エ、何でゐるか、前かど北國へお飛脚に往かれた、足のかるい足輕殿か」平「左様でござります。殿様の御切腹を、北國にて承はりまして、南無三寶と宙を飛で歸りまする道にて、お家も召上られ、一家中ちりぐと、承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ、御恩は替らぬお主の仇、師直めを一討と鎌倉へ立越、三ヶ月が間、非人と成て、付狙ひましたけれ共、敵は用心厳しく、近寄事も叶ませず、所詮腹かつさばかんと存じましたが、國元の親の事を思ひ出しまして、すぐ歸りました。所に、天道様のお知らせにや、いづれも様方の一味連判の様子承はりますと、ヤレ嬉しや有がたや、と取物も取敢へず、あなた方の旅宿を尋、一向お頼申上ましたれば、出かした、ういやつじや、お頭へ願ふてやろとお詞に縋り、是迄推参仕りました。師直屋敷の」典「アこれくく、ア其元は足輕では無ふて、大きな口がるじやの。何と牽頭持なされぬか。尤みたくしも、蚤の頭を斧で割た程、無念な共存じて、四五十人一味を拵へて見たが、アあぢな事の、よう思ふて見れば、仕損じたら此方の首が轉り、仕負せたら跡で切腹、何方でも死ねばならぬ

堪らぬ―愉快で
たまらん

押れぬ―争はれ
ぬ

といふは、人參飲で首縊る様な物。殊に其元は、五兩に三人扶持の足輕、お腹は立られな、はつち坊主の報謝米程取て居て、命を捨て敵討せうとは、そりや青海苔貫た禮に、太々神樂を打様な物。我等知行千五百石、貴様と比べると、敵の首は斗升で量る程、取ても釣合ぬ。所で止めた。ナ聞へたか、兎角浮世は斯うした物じや。つよてんくく、なぞと引かけた所は、堪らぬ。」「平」是は山良助様のお詞とも覺へませぬ。僅三人扶持取拙者めでも、千五百石の御自分様でも、繋ぎました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押に押れぬは御家の筋目、殿の御名代もなされます、歴々様方の中へ、見る影もない私めが、指加へてとお願ひ申は、憚共慮外共、ほんの猿が人真似。お草履を掴んで成共、お荷物を擔いて成共參じませう。お供に召連れられて。ナ申、コレ申々。是はしたり寐てござるそふな。」「喜」コレサ平右衛門、あつたら口に風ひかすまひ。由良助は死人も同然。矢間殿、千崎殿、モウ本心は見へましたか。申合せた通計ひませうか。」「彌」いか様、一味連判の者共への見せしめ、いざいづれも」と立寄るを、平「ヤレ暫く」と平右衛門、おしなだめ傍に寄、「つくぐ」思ひ廻しますれば、平君にお別れなされてより、怨を報はんと種々の艱難、木にも萱にも心を置、人の

善惡の云々一障子の向ひに惡黨九太夫様子を覗ふ故いふ

寄たぞや一年寄た事
大功は細瑾を云云—大功をなすものは些細な義理を捨てゑる史記に大行不顧細瑾大體不辭—小讓とあり
さりとは云々—ア、おいて貰はふ
あんでもない事—いふ迄もない事

譏無念をば、じつとこたへてござるからは、酒でも無理に參らずば、是迄命も續きますまい。醒ての上の御分別」と、無理に押へて三人を、伴ふ一間は善惡の、明りを照す障子の内、影を隠すや、三月の入山科よりは一里半、息を切たる嫡子力彌、内を透して正體なき父が寢姿、起すも人の耳近し、と枕元に立寄て、轡に代る刀の鐔音、鯉口ちやんと打鳴せば、むつくと起て、典ヤア力彌か。こい口の音響せしは、急用有てか、密にく」カ「只今御臺かほよ様より、急のお飛脚密事の御狀」典外に御口上はなかつたか」カ敵高師直歸國の願ひ叶ひ、近々本國へ罷歸る、委細の義は、御文との御口上」典よし、其方は宿へ歸り、夜の内に迎の駕、往けく」カはつ」と猶豫ふ隙もなく、山科指して引返す。典「先様子氣遣」と、狀の封じを切所へ、九大星殿、由良殿、斧九太夫でござる、御意得ませふ」と、聲懸けられ、典是は久しやく。一年も逢ぬ内、寄たぞや寄たぞや。額に其皺のばしにお出か。アノ爰な筵破めが」九「イヤ由良殿、大功は細瑾を願ずと申が、人の譏も構はず遊里の遊び、大功を立る基、適の大丈夫末頼もしう存る」典「ホテ、是は堅いはく、石火矢と出掛けた。去とはおかれい」九「イヤア由良助殿とほけまい、誠貴殿の放埒は」典「敵を討つ術と見へるか」九「おんでもない事」典「忝い。四十に餘つ

けもない事少
しもない

速夜—命日の前

て色狂ひ、馬鹿者よ狂氣よと、笑はれふかと思ふたに、敵を討術とは九太夫殿、ホ、ウ
嬉しいく「九スリヤ其元は、主人鹽治の仇を報ずる所存はないか」典「けもない事く。
家國を渡す折から、城を枕に討死といふたのは、御臺様への追従。時に貴様が、上へ對
して朝敵同然と、其場をついと立た、我等は跡にとしやちばつて居た、いかるたわけの。
所で仕廻は付ず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそくく。今此安樂な樂するも貴
殿のおかけ、昔の好は忘れぬく、堅みをやめて碎おれく」九「いか様此九太夫も、昔
思へば信太の狐、化顯はして一獻酌もふか。サア由良殿、久しぶりだお盃」典「又頂戴と
會所めくのか」九「指しおれ香は」典「香おれ指すは」九「てうと受おれ肴をするは」と、傍
に有合銷肴、挟んでずつと指出せば、典「手を出して、足を戴く銷肴、忝い」と戴て
喰んとする手をじつととらへ、九「コレ由良助殿、明日は主君鹽治判官の御命日。取分速夜
が大切と申が、見事其肴、貴殿は喰ふか」典「たべるく。但主君鹽治殿が、銷になられた
といふ便宜が有たか。エ愚痴な人では有。こなたやおれが浪人したは、判官殿が無分別
から。スリヤ恨こそ有、精進する氣微塵もごあらぬ。お志の肴賞翫致す」と、何氣
もなく只一口に味ふ風情。邪智深き九太夫も、鞠れて詞もなかりける。典「扱此肴では香

しどろもどろ
亂れる
末社一帯間

魂一刀の事刀は
武士の魂といふ
故
赤銅一鎚て赤く
なりし刀を嘲け
つていふ

松浦佐用姫一夫
狭手彦を墓うて
石に化せし故事

ぬく。鷄しめさせ鍋焼させん。其元も奥へお出。女郎共諒へく」と、足元もしどろもどろの浮拍子、ツ、テンく、馬おのれ末社ども、めれんになさで置べきか」と、騷にまぎれ入にける。始終を見届鷺坂内、二階より下り立、「九太夫殿、子細とつくと見届申た。主の命日に、精進さへせぬ根性で、敵討存も寄ず。此通主人師直へ申聞、用心の門を開かせませう」九成程最早御用心に及ばぬ事「件コレサまだ爰に刀を忘れて置ました」九「ほんに誠に大馬鹿者の證據、嗜の魂見ましょ。扱錆びたりな赤鯛」件「ハ、ハ、ハ、ハ」九「彌本心顯はれ御安堵く。ソレ九太夫が家來迎の駕籠」家來「はつ」と答へて持出る。九「サア件内殿お召なされ」件「先御自分は老體ひらにく」九「然らば御免」と乗移る。件「イヤ九太殿、承はれば此所に、勘平が女房が勤て居ると聞きました。貴殿には御存ないか。九太夫どのく」といへど答へず。コハ不思議と、駕の簾を引明れば、内には手ごろの庭の飛石、件「コリヤどふじや」九太夫は松浦さよ姫をやられた」と、見廻す。このたの椽の下より、九「コレく」件内殿、九太夫が駕籠抜の計略は、最前力彌が持参せし書翰が心元なし。様子見届跡より知らさん。矢張我等が歸る體にて、貴殿は其駕に引添て「件「合點々々」と點頭合、駕には人の有體に、見せてしづく立歸る。折に二階へ勘平

はどけー佛にか
盛潰されー酒に
酔はされ

が、妻のおかるは酔さまし、はや里馴れて吹風に、憂を晴して居る所へ 典ちよと往て来る。由良助共有ふ侍が、大事の刀を忘れて置た。つる取て来る其間に、掛物もかけ直し、爐の炭もついでおきや。ア、それくく、こちらの三味線踏折るまいぞ。是はしたり、九太は往なれたそふな一 歌父よ母よと泣聲聞ば、妻に鸚鵡のうつけし言の葉、エ何じやいな、おかしやんせ。邊り見廻し由良助、釣燈籠の明りを照し、讀長文は御臺より、敵の様子細々と、女の文の後や先、りくではかどらず。餘所の戀よと羨しく、おかるは上より見おろせど、夜目遠目なり字性もおほろ、思ひ付たる延鏡、出して寫して讀取文章、下家よりは九太夫が、繰下す文月影に、透し讀とは神ならず、ほどけかよりしおかるが玉笄、ばつたり落れば、下にははつと見上て後へ隠す文、椽の下には猶ゑつほ、上には鏡の影隠し、かる「由良さんか」典「おかるか。そもじは其處に何してぞ」かる「わたしやおまへに盛潰され、あんまりつらさに酔さまし、風に吹かれて居るはいな」典「ムウハテナふ、よう風にふかれてじやの。イヤかる、ちと咄したい事がある、屋根越の天の川で、爰からは云れぬ。ちよつとおりて給もらぬか」かる「咄したいとは頼たい事かへ」由「まあそんな物」かる「廻つて來やんしよ」典「いやく、段梯子へおりたらば、中居が

舟玉様―舟を守
る神
洞庭の云々―洞
庭は支那の瀟湘
八景の一にて月
によるし

見付て酒にせう。ア、どふせうな。ア、コレ。幸爰に九つ梯子、是を踏へておりて
たも」と、小屋根に掛ければ、かる「此梯子は勝手が違ふて、チ、怖。どふやら是は危い
物」典「大事ないく。あぶないこはいは昔の事。三間づつ跨けても、赤がうやくも入ら
ぬ年ばい」かる「阿呆いはんすな。舟に乗つた様で怖いわいな」典「道理で舟玉様が見へる」
かる「チ、のぞかんすないな」洞庭の秋の月様をおがみ奉るじや」かる「イヤモウそんな
ら下りやせぬぞ」典「下りざおろしてやろ」かる「アレ又悪い事を」典「喧しい生娘かなんぞ
の様に、逆縁ながら」と後より、じつと抱締め抱おろし、「なんとそもじは御覽じたか」
かる「アイいゝゑ」典「見たであろく」かる「アイなんじややら、面白そふな文」典「あの上
から皆讀だか」かる「チ、くど」典「ア身の上の大事とこそはなりにけり」かる「何の事じや
ぞいな」典「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房に成てたもらぬか」かる「おかんせ嘘
じや」典「サ嘘から出た眞でなければ根が遂けぬ。おふと云やく」かる「イヤ云ふまい」
典「なぜ」かる「お前のは嘘から出た眞じやない。實から出た嘘じや」典「おかる受出そふ」
かる「エ、」典「うそでない證據に、今宵の内に身受せう」かる「ムウいやわしには」典「間夫
が有なら添してやろ」かる「そりやマア眞かへ」典「侍冥利、三日成共園ふたら、夫からは

わらをでの一笑
ふのであらう

勝手次第」かゝる「ハア、嬉しうござんす。といはして置いてわらをでの」典いや直に亭主に金渡し、今の間に埒さそふ。氣遣せずと待てるや」かゝる「そんなら必待て居るぞへ」由「金渡して来る間、何方へも往きやるな。女房じやぞ」かゝる「夫もたつた三日」典「それ合點」かゝる「忝ふござんす」歎世にも因果な者ならわしが身じや、可愛男にいくせの思ひ、エ、なんじやいなおかしやんせ、忍び音に鳴く小夜千鳥。奥で謠ふも身の上と、おかるは思案取々の、折に出合平右衛門、「妹でないか」かゝる「ヤア兄様か。恥しい所で逢ました」と顔を隠せば、平「苦しうない。關東より戻りがけ、母人に逢てくはしく聞た。夫の爲お主の爲、よく賣れた。出かしたく」かゝる「そふ思ふて下さんすりやわしや嬉しい。したがまあ悦んで下さんせ、思ひがけなう、今宵受出さると筈」平「夫は重疊、何人のお世話で」かゝる「お前も御存の大星由良助様のお世話で」平「何じや由良助殿に受出される。夫は下地から馴染か」かゝる「何のいな、此中より二三度酒の相手。夫が有ば添してやろ、隙がほしくば隙やろ、と結構過た身請」平「扱は其方を、早の勘平が女房と」かゝる「イエしらすじやぞへ。親夫の恥なれば、明して何の云ませう」平「ムウすりや本心放埒者。お主の怨を報ずる所存はないに極つたな」かゝる「イエくこれ兄様、有ぞえく。高うは云はれぬ、コ

レかふく」と呼よべば、平「ムウすりや其文そのふみを慥たしかに見みたな」かゝる「残のこらず讀よんだ其跡あとで、互たがひに見合あす顔かほと顔かほ、それからじやらつき出して、つる身請みうけの相談さうだん」平「アノ其文そのふみ残のこらず讀よんだ跡あとで」かゝる「アイナ」平「ムウそれで聞きへた。妹いもとても通のがれぬ命いのち、身共みどもに呉くれよ」と拔打ぬきうちに、はつしと切きば、ちやつと飛退とびのき、かゝる「コレ兄様あにさん、私わたしには何誤なにあやまり。勘平かんぺいといふ夫そとも有あり、急度きつど二親有ふたおやあるからは、こな様の儘さまにも成なるまい。請出うけだされて親夫おやをつとに、逢あふと思おもふがわしや樂たのしみ。どんな事ことでも誤あやまらふ、赦ゆるして下くだんせ赦ゆるして」と、手てを合あすれば平右衛門へいぶもん、拔身ぬきみを捨すててどうど伏ふし、悲歎ひたんの涙なみだにくれけるが、平「可愛かはいや妹いも、何なんにもしらぬな。親與市兵衛殿おやよいちべゑどのは、六月二ぐわつ十九日の夜、人に切きれてお果はてなされた」かゝる「ヤアそれはまあ」平「コリヤまだ悔ひりすな。請出うけだされ添そはふと思おもふ勘平かんぺいも、腹切はらきて死しだはよい」かゝる「ヤアくくそれはまあほんかいの。コレのふく」と取付とりつけて、わつと計はかりに泣沈なきしづむ。平「チ、道理だうり々々。様子やうす咄はなせばながい事こと。お痛いたはしいは母者人ははとじやひと、云出いひだしては泣思なきおもひ出しては泣なき、娘むすめかるに聞きいたら、泣死なきじにすゐるであろ、必かならずいうてくれなとのお頼たのみ、いふまいと思おもへ共とも、迎むかへ通のがれぬそちが命いのち。其譯そのわけは、忠義ちうぎ一途いつづに凝固こりかたつた由良助殿ゆらのすけどの、勘平かんぺいが女房にようばうと知らねば、請出うけだす義理ぎりもなし、元來色もとよりには猶耽ふけらず、見みられた狀じやうが一大事いちだいじ、請出うけだし差殺さころす、思案しあんの底そこと慥たしかに見みへた。よしそふなう

東の供―師直の
敵討の供

ても壁に耳、外より洩ても其方が科、密書を覗見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手にかきよより我手に掛け、大事を知たる女、妹とて赦されずと、夫を功に連判の數に入てお供に立ん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば數には入られぬ、聞分て命をくれ。死でくれ妹」と、事を分たる兄の詞、おかるは始終せき上く、「便のないは身の代を、役に立ての旅立が、暇乞にも見へそな物と、恨でばかりおりました。勿體ないが父様は、非業の死でもお年の上、勘平殿は三十に、成やならず死るのは、嘸悲しかる口惜かる。逢たかつたで有ふのに、なぜ逢せては下さんせぬ。親夫の精進さへ、しらぬはわたしが身の因果、何の生ておりませう。お手にかゝらば噂様が、お前をお恨なされましよ、自害した其跡で、首なりと死駭なりと、功に立なら功にさんせ。さらばでござる兄様」と、いひつゝ刀取上る。「やれましてしばし」と、止むる人は由良助、「はつ」と驚く平右衛門、おかるは「放して殺して」と、あせるを押へて、由ホウ兄弟共見上た。疑ひはれた。兄は東の供を許す。妹はながらへて未來への追善」か「サア其追善は冥途の供」と、もぎ取刀をしつかと持添、由夫、勘平連判には加へしかど、敵一人も討とらず、未來で主君に云譯有まじ。其云譯はコリヤ爰に」と、ぐつと突込む疊の透間。下には九太

獅子身中の虫—
に王經の語にて
身中より出て
身を斃す奴

三代相恩—祖父
より自分迄三代
主君より受けた
恩

のた打廻—もが
きまはる

夫肩先縫はれて七顛八倒。「それ引出せ」の下知より早く、椽先飛びおり平右衛門、朱に染だ體をば、無二無三に引ずり出し、平「ヒヤア九太夫め。ハテよい氣味」と引立て、目通へ投付れば、起立せもせず由良助、髻を掴んでぐつと引寄、「獅子身中の虫とは儂が事我君より高知を戴莫大の御恩を著ながら、敵師直が犬と成て、有事ない事よう内通ひろいだな。四十余人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連添女房を、君傾城の勤をさするも、亡君の怨を報じたさ。寐覺にも現にも、御切腹の折柄を、思ひ出して無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。取分今宵は殿の速夜、口に諸々の不淨をいふても、愼に愼を重ねる由良助に、よう魚肉をつき付たなア。いやといはれず應といはれぬ胸の苦しさ、三代相恩のお主の速夜に、咽を通した其時の心、どの様に有ふと思ふ。五體も一度に惱亂し、十四の骨々も碎る様に有たはやい。へエ、獄卒め魔王め」と、土に摺付捻付て、無念の涙にくれけるが、由コリヤ平右衛門、最前鎗刀を忘置たは、こいつをばなぶり殺といふしらせ。命取すと苦痛させよ」平「畏た」と拔より早く、踊上り飛上り、切共僅二三寸、明所もなしに疵だらけ、のた打廻つて、平右衛門殿、おかる殿、詫してたべ」と手を合せ、以前は足輕づれなりと、目にもかけざる寺岡に、三拜するぞ見苦しき。由此場で殺

隠れ聞一疵の口
を隠すと外に隠
れ聞くとかく

水糝—加茂川に
沈める事の洒落

ふち—扶持と淵
浪の下人云々—
浪人の大石をさ
す浪をなす鹽治
に縁をかく
山科—思ひが山
山あるにかく
富士の煙云々—
煙の空に消えて
行方も知らぬ我
法師—
嫁入の門火—嫁
入の門出に門口
再び歸らぬ祝な
三保—見にかく
行烈—行列

第八

道行旅路の嫁入

さば云譯むづかし。喰醉た躰にして、館へ連よ」と羽織打著せ疵の口、隠れ聞たる矢間
千崎竹森が、障子ぐはらりと引明、「由良助殿、段々誤り入ましてござります」曲それ平
右衛門、喰醉た其客に、加茂川で水糝を喰はせい」平「ハア」曲「往け」

浮世とは、誰が言初めて飛鳥川、ふちも知行も瀬と變り、寄邊も浪の下人に、結ぶ鹽治
の誤は、戀の枷抗加古川の、娘小浪が云號、結納もとらず其儘に、振捨られし物思ひ、母
の思ひは山科の、聲の力彌をちからにて、住家へ押て嫁入も、世に有なしの義理遠慮、嫉
つれず乗物も、やめて親子の二人連、都の空に心ざす、雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添
て、手先覺へず凍え坂、薩埵峠にさしかより、見返れば不二の煙の空に消、行衛もしれ
ぬ思ひをば、晴す嫁入の門火ぞと、いはふて三保の松原に、つづく竝松街道を、狹しと
打たる行烈は、誰としらねど浦山し。ア、世が世ならあのごとく、一度の晴と花かざり、
伊達をするがの府中過、城下過れば氣散じに、母の心もいそぐと、二世の盃濟で後、

せとの染飯云々
―染飯のこはい
と怖い
大井川―翟ふに
かく
日陰に花云々―
内證女が出来た
かと也
島田―しまはう
吉田―よし

蟋蟀云々―百人
一首なる良經公
の歌
せきとむる―關
の地名と垣く

閨の睦言私言、親知らず子しらすと、鶯の細道もつれ合、嬉しからふと手を引ば、アノ
母様の差合を、脇へこかして鞠子川、うつ山の山邊の現にも、殿御初の新枕、せとの染飯
強るやら、恥かしいやら嬉しいやら、案じて胸も大井川、水の流と人心、若しや心は替
らぬか、日陰に花は咲ぬかと、いふて島田の憂晴し、我身の上を斯とだに、人しらすか
の橋越へて、行ば吉田や赤坂の、招く女の聲揃へ、歌縁を結ばふ、清水寺へ参らんせ、音
羽の瀧にざんぶりざ、毎日そふいふて拜まんせ、そうじやいな、しよきがなんかうがかい
れいにうきう、神樂太鼓に、ヨイコノこちの晝寐を覺された、都殿御に逢ふてつらさが語
りたや、ソウトモ、若も女夫とかゝ様ならば、伊勢さんの引合、鄙びた歌も身に取て、よい
吉左右になる海瀾、熱田の社あれかとよ、七里の渡帆を上て、櫓拍子揃へて、ヤツシ
音は鈴虫か、いや蟋蟀鳴くや霜夜と詠たるは、小夜更けてこそくれ迄と、限り有舟急が
んと、母が走れば娘も走り、空の霞に笠覆ひ、舟路の友の跡や先、庄野龜山せきとむる、
伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越へ、間の土山雨が降る、水口の葉に言囃す、石
部石場で大石や、小石拾ふて我夫と、撫つ擦りつ手に据へて、頓て大津や三井寺の、麓
を越て山科へ、程なき里へ三重急ぎゆく。

第九

仁體―身柄
けうとい―すば
らしい
朝夕に云々―朝
夕に見ればこそ
あれ住吉の浦よ
りをちの淡路島
山(新後拾遺集)
通らぬやつ―不
粹な奴
端香―茶の出ば
な
鹽茶―酒の酔を
醒すもの愛想よ
しの意をかく
降たる雪かな云
云―謡曲鉢の木
の雪は鷺毛に似
て飛て散亂し人
は鶴髪を著て立
て徘徊すの句を
もどる

風雅でもなく洒落でなく、しやうことなしの山科に、由良助が佗住居、祇園の茶屋に昨
日から、雪の夜明し朝戻り、牽頭中居に送られて、酒がほたへる雪轉し、雪はこけいで
雪こかさされ、仁體捨し遊びなり。中屋旦那、申旦那、お座敷の景ようござります。お庭の
藪に雪持てトなつた所、とんと繪に畫いた通、けうといじやないかのふお品」品「サア此
景を見て外へは、何方へも往きたうござりますまいがな」典へッ朝夕に見ればこそ有住
吉の岸の向の淡路島山、といふ事しらぬか。自慢の庭でも、内の酒は呑ぬく。エ、通
らぬやつく。サアく奥へく。奥はどこにぞお客が有」と、先に立て飛石の、詞も
しどろ足取も、しどろに見ゆる酒機嫌。お戻りそふなと女房の、お石が輕う汲で出る、茶
屋の茶よりも氣の端香、お寒からふと惱氣せぬ、詞の鹽茶醉醒し。一口呑で跡打明、典「エ
エ奥、無粹なぞやく、折角面白ふ酔た酒、醒せとは。ア、ア、降つたる雪かな、文藝い
かに余所の和郎達が、無惱氣とや見給ふらん。それ雪は、打綿に似て飛で中入と成、奥
はかく様といへば、とつと世帯染といへり。加賀の二布へお見舞の遅いは御用捨、伊勢

はたへーふざけ
る

海老と盃、穴の稻荷の玉垣は、朱ふなければ信がさめると云様な物かい。チイこれこれ、こぶら反りじゃ、足の大指折たく。おつとよし。次手にかうじや」と、足先にで、お石「ア、これ、はたへさしやんすな、嗜しやんせ。酒が過るとたはるがない。ほんに世話でござらふの」と、物和かにあひしらふ。力彌心得奥より立出、「申々母人、親父様は御寢なつたか。是上られい」と指出す。親子が所作を塗分けても、下地は同じ桐枕、由「チ、チ、應」は夢現、「イヤもふ皆往にやれ」中屋「ハイくくく、そんならば旦那へ宜う」若旦那と御出、を目遣て、往に際惡う歸りける。聲聞へぬ迄行過させ、由良助枕を上、「ヤア力彌、遊興に事寄丸めた此雪、所存有ての事じやが、何と心得たぞ」カ「ハツ雪と申物は、降時には少の風にも散り、軽い身でござりませう共、彼の如く一致して丸まつた時は、嶺の雪吹に岩をも砕く、大石同然。重いは忠義、其重い忠義を思ひ、丸めた雪も余り日敷を延過してはと思召ての」由「イヤく、由良助親子、原郷右衛門など四十七人連判の人数は、皆主なしの日陰者、日陰にさへ置ば解ぬ雪、せく事はないといふ事。爰は日常り奥の小庭へ入て置、螢を集め雪を積むも、學者の心長き例。女共切戸内から明てやりやれ。堺への状態めん、飛脚が來たらばしらせいよ」カ「アイく」

間—アイにかく

りん—婢の名
つかふど—けん
どん

姫—嫁型兩方の
舅姑にいふ

間の切戸の内、雪轉し込戸をたつる、襖引立入にける。人の心の奥深き、山科の隠れ家を、尋て爰に來る人は、加古川本藏行國が女房となせ、道の案内の乗物を傍に待せ、只一人、刀脇指さすがけに行義亂さず庵の戸口、「頼ませうく」といふ聲に、襷はづして飛で出る、昔の奏者今のりん、「どうれ」といふもつかふど成。となせ「ハツ大星由良助様お宅は是かな。左様ならば、加古川本藏が女房となせでござります、誠に其後は打絶ました、ちとお目にかゝりたい様子に付、遙々参りました、と傳られて下され」と、云入させて表の方、「乗物はへ」と昇寄せ、「娘爰へ」と呼出せば、谷の戸明て鶯の、梅見付たる微笑顔、目深に被たる帽子の内、小退アノ力彌様のお屋敷はもふ爰かへ。わしや恥しい」と媚かし。取散らす物片付て、「先お通りなされませ」と、下女が傳へる口上に、となせ「駕の者皆歸れ。御案内頼ます」と、いふもいそぐ娘の小浪、母に付添座に直れば、お石しとやかに出向ひ、「是はく、お二方共ようぞや御出。疾よりお目に掛る筈お聞及びの今の身の上。お尋に預りお恥しい」となせ「あの改まつたお詞。お目に掛るは今日初めなれど、先達て御子息力彌殿に、娘小浪を言號致したからは、お前なりわたしなり、姫同士、御遠慮に及ばぬ事」も石「是はく、悍入御挨拶。殊に御用繁い本藏様

の奥方、寒空といひ思ひがけない御上京。となせ様は兎もあれ、小浪御寮嘸都珍らし
 らふ。祇園清水智恩院、大佛様御覽じたか。金閣寺拜見あらば好い傳が有ぞへ」と、心
 置なき挨拶に、只「あいく」も口の内、帽子まばゆき風情なり。となせは行義改めて、
 「今日参る事余の義にあらず。是なる娘小浪云號致して後、御主人鹽治殿不慮の義につ
 き、由良助様力彌殿、御在所も定かならず。移り變るは世の慣ひ、變らぬは親心。兎や
 角と聞合せ、此山科にござる由承りました故、此方にも時分の娘、早うお渡し申たさ。
 近比押付がましいが、夫も参る筈なれど、出仕に隙のない身の上、此二腰は夫が魂、是
 を指せば、則夫本藏が名代と、私が役の二人前、由良助様にも御意得まし、祝言させて
 落付たい。幸今日は日柄もよし、御用意も下さりませ」と相述る。も五「是は思ひ
 も寄ぬ仰。折悪う夫由良助は他行。去ながら若宿に居りまして、お目に掛り申さふなら
 ば、御深切の段千萬忝う存まする、云號致した時は、故殿様の御恩に預り、御知行頂
 戴致し罷在故、本藏様の娘御を貰ませう、然らば呉れふと云約束は申たれ共、只今は
 浪人、人遣迎もござらぬ内へ、如何に約束なればとて、大身な加古川殿の御息女、世話
 に申提灯に釣鐘、釣合ぬは不縁の基、ハテ結納を遣はしたと申ではなし、どれへ成と

外々へ、御遠慮なう遣はされませ、と申さるゝでござりませう」と、聞てはつとは思ひながら、となせ「アノまあお石様のおつしやる事。いかに卑下なされう連、本藏と由良助様、身上が釣合ぬとな。そんならば申ませう、手前の主人は小身故、家老を勤る本藏は五百石、鹽治殿は大名、御家老の由良助様は千五百石。すりや本藏が知行とは、千石違ふを合點で云號はなされぬか。只今は御浪人、本藏が知行とは、皆違ふてから五百石」お石「イヤ其お詞違ひまする。五百石は扱置、一萬石違ふても、心と心が釣合へば、大身の娘でも、嫁に取まい物でもない」となせ「ム、こりや聞所お石様。心と心が釣合ぬとおつしやるは、どの心じやサア聞ふ」お石「主人鹽治判官様の御生害、御短慮とは云ながら、正直を元とするお心より發し事。それに引替へ師直に金銀を以て媚諂ふ、追蹤武士の祿を取本藏殿と、二君に仕へぬ由良助が大事の子に、釣合ぬ女房は持されぬ」と、聞もあへず膝立直し、となせ「諂ひ武士とは誰が事、様子によつては聞捨られぬ。そこを赦すが娘の可愛さ。夫に負るは女房の常、祝言有ふが有まいが、云號有からは、天下晴ての力彌が女房」お石「ム、面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つて此母が、去つたノ」と云放し、心隔の唐紙を、はたと引立入にける。娘はわつと泣出し、「折角思ひ思はれ

筋目を云々―昔
の千五百石をい
ひ立て力彌を金
満家の町人の掣
にするかと也

あじやらにも一
戯にも

て、云號した力彌様に、逢せて遣ろとのお詞を、便に思ふて來た物を、姑御のどう慾に、
去られる覺は私やない。母様どふぞ詮言して、祝言させて下さりませ」と、組り歎けば
母親は、娘の顔をつくぐと、打眺めく、「親の慾目かしらね共、ほんにそなたの器量
なら、十人竝にも勝つた娘。よい掣をがなと詮義して、云號した力彌殿、尋て來た甲斐
もなう、掣にしらす去つたとは、義理にもいはれぬお石殿、姑去は心得ぬ。ム、ム
ム扱は浪人の身のよるべなう。筋目を云立、有徳な町人の掣に成て、義理も法も忘れた
な。ナフ小浪、今いふ通の男の性根、去つたといふを面當、欲しがる所は山々、外へ嫁
入りする氣はないか。コレ大事の所、泣ず共しつかりと返事仕や。コレどふじやく」と
と、尋る親の氣は張弓、小浪、アノ母様の胴慾な事おつしやります。國を出る折父様のお
つしやつたは、浪人しても大星力彌、行義といひ器量といひ、仕合な掣を取た、貞女兩
夫に見えず、譬夫に別れても、又の夫を設なよ、主有女の不義同然、必々寐覺に
も、殿御大事を忘るゝな、由良助夫婦の衆へ孝行盡し、夫婦中、睦じい迎あじやらに
も、悋氣ばして去らるゝな、案ぜうか迎隠さずと、懷妊に成たら早速に、しらして呉
れと、おつしやつたを、わたしや能う覺て居る。去れて往んで父様に、苦に苦を懸け

か
およそ—おろそ

鶴の巢籠—尺八
の曲名にて鶴の
子をいとしがる
意をのぶ

てどふいふて、どふ云譯が有ふ共、力彌様より外に餘の殿御、わしやいや／＼」と一筋に、戀を立ぬく心根を、聞に堪兼母親の、涙一途に突詰し、覺悟の刀拔放せば、「母様是は何事」と、押留められて顔を上、母何事とは曲がない。今もそなたがいふ通り、一時も早う祝言させ、初孫の顔見たい、と娘に甘いは爺の習ひ、悦んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去れて戻りました迎、どふ連て往なれふぞ。といふて先に合點せにや、仕様もやうもないわいの。殊にそなたは先妻の子、わしとはなさぬ中じや故、およそにしたかと思はれては、どふも生ては居られぬ義理。此通を死だ跡で、爺御へ云譯してたもや」小アノ勿躰ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死べき筈。生てお世話に成上に、苦を見せまする不孝者、母様の手にかけて、わたしを殺して下さりませ。去れても殿御の内、爰で死ねば本望じや。早う殺して下さりませ」となせ「チ、よう云やつた出かしやつた。そなた計殺しはせぬ、此母も三途の友、そなたをおれが手に懸けて、母も追付跡から行。覺悟はよいか」と立派にも、涙留めて立かより、「コレ小浪、アレあれを聞きや、表に虚無僧の尺八、鶴の巢籠。鳥類でさへ子を思ふに、科もない子を手に掛るは、因果と因果の寄合」と、思へば足も立兼て、慄ふ拳を漸に、振上る刃の下、尋

目八分一息のか
からぬ迄の高さ

浪の平行安一有
名なる薩摩の刀
鍛冶の名

常に座を占め手を合せ、「南無阿彌陀佛」と、唱る中より「御無用」と聲懸けられて思はずも、たるみし拳尺八も、俱にひつそと靜まりしが、となせ「チ、そふじや。今御無用と止めたは、虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で、無用といふに氣おくれし、未練なと笑はれな。娘覺悟はよいかや」と、又振上る又吹出す、とたんの拍子に又「御無用」となせ「ム、又御無用と止めたは、修行者の手の内か、振上た手の中か」お石「イヤお刀の手の中御無用。勲力彌に祝言させう」となせ「エ、そふいふ聲はお石様、そりや眞實か誠か」と、尋る襖の内よりも、ウタイあひに相生の、松こそ目出度かりけれど、祝儀の小謠白木の小四方、目八分に携出、お石「義理ある中の一人娘、殺さふと迄思ひ詰たとなせ様の心底、小浪殿の貞女。志がいとをしさ、させにくい祝言さす其かはり、世の常ならぬ嫁の盃、請取は此三方、御用意あらば」と指置ば、少は心休りて、拔たる刀鞘に納め、となせ「世の常ならぬ盃とは、引出物の御所望ならん。此二腰は夫が重代、刀は正宗、指添は浪の平行安、家にも身にも替へぬ重寶。是を引出」と皆迄云さず、お石「浪人と侮つて價の高い二腰、まさかの時に賣拂へと、いはぬ計の掣引出。御所望申は是ではない」となせ「ム、そんなら何が御所望ぞ」お石「此三方へは加古川本藏殿の、お首を乗せて貰たい」となせ「エ、

そりや又なぜな」も、御主人鹽治判官様、高師直にお恨有て、鎌倉殿で一刀に切懸給ふ。其時こなたの夫加古川本藏、其座に有て抱留、殿を支た計に、御本望も遂られず、敵は漸薄手計、殿はやみく御切腹。口へこそ出し給はね、其時の御無念は本藏殿に憎しみが懸るまいか、有まいか。家來の身として其加古川が娘、あんかんと女房に持様な力彌じやと、思ふての祝言ならば、此三方へ本藏殿の白髪首。いやとあればどなたでも、首を並べる尉と姫。それ見た上で、盃させう。サ、サアいやか、應かの返答を」と、尖き詞の理屈詰。親子ははつと指裏、途方に暮れし折柄に、「加古川本藏が首進上申。お受取なされよ」と表に扣へし薦僧の、笠脱捨て徐々と、内へ這入は、小浪「ヤアお前は爺様」となせ「本藏様、爰へどふして此形は、合點がいかにぬこりやどふしや」と、咎る女房、本「ヤアざはく」と見苦しい、始終の子細皆聞た。そち達にしらさず、爰へ來た様子は追て。先黙れ。其元が由良助殿御内證お石殿よな。今日の時宜斯あらんと思ひ、妻子にも知らせず、様子を窺ふ加古川本藏、案に違はず拙者が首、聲引出に欲しいとな、ハ、ハ、ハ、ハ、いやはやそりや侍のいふ事。主人の怨を報はんといふ所存もなく、遊興に耽り、大酒に性根を亂し、放埒成身持日本一の阿房の鏡、蛙の子は蛙に成、親に劣ぬ力彌めが大だは

なまくら鋼一な
まくら武士と鈍
刀とかく
ふち放れ一縁と
扶持

け、狼狽武士のなまくら鋼、此本藏が首は切ぬ。馬鹿盡すな」と踏碎く、「破三方のふち
放れ、此方から聲に取ぬ。ちよこざいな女め」と、云せも果す、お石「ヤア過言なぞ本藏殿。
浪人の錆刀、切るか切ぬか鹽梅見せう。不祥ながら由良助が女房。望む相手じや、サ
ア勝負くく」と、裾引上、長押に懸けたる鎧追取、突かよらんす其氣色、「是は短氣な
マア待て」と、止隔る女房娘。本「邪魔ひろぐな」とあらけなく、右と左へ引退る、間も
あらせず突かくる、鎧のしほ首引攔み、振つて拂へば身を背け、諸足縫はんと閃かす。
刃棟を蹴つて蹴上れば、拳放れて取落す、鎧奪はれじ、と走寄、腰際帶際引攔、どふど
打付動かせず、膝に引敷強氣の本藏、敷れてお石が無念の齒がみ。親子ははあく危む
中へ、駈出る大星力彌、捨たる鎧を取手も見せず、本藏が鳥手の肪、弓手へ通れと突通
す。うんと計にかつぱと伏す。「コハ情なや」と母娘、取付歎くに目も懸けず、止め刺さ
んと取直す。「ヤア待力彌早まるな」と、鎧引留て山良助、手負に向ひ、典一別以來珍ら
しよ本藏殿。御計略の念願届き、聲力彌が手にかよつて、嘸本望でござらふの」と、星を
指いたる大星が、詞に本藏目を見開き、本「主人の鬱憤を晴さんと此程の心遣。遊所の出
合に氣を緩ませ、徒黨の人数は揃ひつらん、思へば貴殿の身の上は、本藏が身に有べき

しらが―知らず
にかく
若い折の遊藝―
例の尺八が役に
立つたと僅か四
日とかく

筈。常春鶴が岡造營の砌、主人桃井若狭助、高師直に恥しめられ、以の外憤り、某を密に召れ、まづかうくの物語、明日御殿にて出くはせ、一刀に討留ると、思詰めたる御顔色、留ても留らぬ若氣の短慮。小身故に師直に、賄賂薄きを根に持て、恥しめたると知たる故、主人に知らせず不相應の、金銀衣服臺の物、師直へ持参して心に染ぬ諂ひも、主人を大事と存るから、賄賂課せ彼方から、誤つて出た故に、切に切れぬ拍子拔、主人が恨もさらりと晴、相手代つて鹽治殿の、難義と成たは、則其日。相手死すば切腹にも及ぶまじと、抱留めたは思ひ過した、本藏が一生の誤りは、娘が難義としらがの此首、聲殿に進ぜたさ、女房娘を先へ登し、媚諂ひしを身の科に、お暇を願ふてな、道を替へてそち達より二日前に京著、若い折の遊藝が益に立た四日の内、こなたの所存を見拔た本藏、手に懸れば恨を晴、約束の通此娘、力彌に添せて下さらば、未來永劫御恩は忘れぬ。コレ手を合して頼入。忠義にならでは捨ぬ命、子故に捨る親心、推量有 由良殿と、いふも涙に咽返れば、妻や娘は有にもあられず、「本に斯とは露しらず、死おくれた計にお命捨るはあまんな、冥加の程が恐ろしい。赦して下され父上」と、かつばと伏して泣叫ぶ親子が心想ひやり、大星親子三人も、俱にしほれて居たりしが、由ヤア、本藏殿、

吳子胥—吳王を
諫め眼を東門に
かけし忠臣
豫讓—晉の忠臣

君子は其罪を惡んで其人を惡まずといへば、縁は縁恨は恨と、格別の沙汰も有べきにと、
嘸恨に思はれんが、所詮此世を去人、底意を明て見せ申さん」と、未前を察して奥庭の、
障子さらりと引明れば、雪を束て石塔の、五輪の形を二つ迄、造立しは大星が成行果を
顯はせり。となせは賢しく、「ム、御主人の怨を討て後、二君に仕へず消るといふお心の
あの雪。力彌殿も其心で、娘を去たの胴欲は、御不便余つてお石様、恨だかわしや悲し
い」も互となせ様のおつしやる事。玉椿の八千代迄共祝はれず、後家に成嫁取た、此様
な目出度悲しい事はない。斯いふ事がいやさに、むごうつらういふたのが、嘸憎かつた
でござんしよなふ」となせ「イ、エイナ、私こそ腹立まよ、町人の聲に成て、義理も法も忘
れたか、といふたのが恥しいやら悲しいやら、どふも顔が上らねぬ、お石様」も互とな
せ様、氏も器量も勝れた子、何として此様に果報拙い生れや」と、聲も涙にせき上る。本
藏熱き涙を押へ、「ハツア、嬉しや本望や。吳王を諫めて誅せられ、辱を笑ひし吳子胥が
忠義は取に足らず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓、日本の大星、昔より今に至る迄、唐と日
本にたつた二人。其一人を親に持、力彌が妻に成たるは、女御更衣に備はるより、百倍
勝つてそちが身は、武士の娘の手柄者、手柄な娘が聲殿へ、お引の目録進上」と、懷中よ

孫吳一兵法家の
孫子吳子

凝ては云々―物
事に一心になれ
ば思慮を失ふ
折しも―下るに
かく

り取出すを、力彌取て押戴き、披き見ればコハいかに、目錄ならぬ師直が屋敷の案内一
 一に、玄關長屋侍部屋、水門物置柴部屋迄、繪圖に委しく書付けたり。由良助はつと押
 戴き、「ヘツエ有難しく。徒黨の人数は揃へども、敵地の案内知れざる故、發足も延引
 せり。此繪圖こそは孫吳が祕書、我爲の六韜三略。兼て夜討と定めたれば、繼梯子にて
 堀を越、忍び入には椽側の、雨戸外せば直に居間、爰を仕切て斯攻て」と、親子が悦び、
 手負ながらもぬからぬ本藏、「イヤ、夫は僻言ならん。用心厳しき高師直、障子襖は皆
 尻ざし、雨戸に合栓合樞、こちては外れず大槌にて、毀たば音して用意せんか、それいか
 が」冉チ、夫にこそ術あれ。凝ては思案に能はずと、遊所よりの歸るさ、思ひ寄たる前
 栽の雪持竹。雨戸をはづす我工夫、仕様を爰にて見せ申さん」と、庭に折しも雪深く、さ
 しにも強き大竹も、雪の重さにひいはりと、しはりし竹を引廻して鴨居に嵌め、「雪に撓
 むは弓同然、此如く弓を拵へ弦を張、鴨居と敷居にはめ置て、一度に切て放つ時は、まつ
 此様に」と積つたる枝打拂へば雪散つて、伸びるは直成竹の力、鴨居撓んで溝はづれ、
 障子残らずばたく。本藏苦しさ打忘れ、「ハ、アしたりく。計略といひ義心とい
 ひ、斯程の家來を持たながら、了簡も有べきに、淺き工の鹽冶殿、口惜き行跡や」と、悔を

歌口―尺八の吹く穴
しめし―ぬらし
知死期時―臨終
尺八煩惱―百八
煩惱にかく
一夜切―一節切
の尺八にかく

聞に御主人の御短慮成御仕業、今の忠義を戦場の、お馬先にて盡さば、と思へば無念に閉塞がる、胸は七重の門の戸を、洩るは涙計なり。力彌は徐々下立ちて、父が前に手をつかへ、「本藏殿の寸志により、敵地の案内知たる上は、泉嘉堺の天河屋義平方へも通達し、荷物の工面仕らん」と、聞もあへず、「何さく、山科に有事隠れなき由良助、人数集めは人目有。一先堺へ下つて後、あれから直に發足せん。其方は母嫁となせ殿諸共に、跡の片付諸事萬事、何もかも心残りのなき様に、ナ、ナ、コリヤあすの夜舟に下るべし。我は幸本藏殿の忍姿を我姿」と、袈裟打掛けて編笠に、恩を戴く報謝がへし、未來の迷晴さん爲、今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の戀慕流し、歌口しめして立出れば、兼て覺悟のお石が歎、「御本望を」と計にて、名残惜さの山々を、いはぬ心のいぢらしさ。手負は今を知死期時、小浪「爺様申しとよ様」と、呼べど答へぬだんまつま、親子の縁も玉の緒も、切て一世の憂別れ。「わつ」と泣母泣娘、俱に死骸に向ひ地の、回向念佛は戀無常、出行足も立留り、六字の御名を笛の音に、南無阿彌陀佛なむあみだ、是や尺八煩惱の、枕並ぶる追善供養、閨の契りは一夜限、心残して三重立出づる。

第十

跡の月云々―先
月から主人の機
嫌が悪くなりて
抜そけ―逃亡

津の國と、和泉河内を引受て、余所の國迄舟寄る、三國一の大湊、堺といふて人の氣も、賢き町に疵もなき、天河屋の義平辻、金から金を設溜、見かけは軽く内證は、重い暮に重荷をば、手づから見世で締括り、大船の船頭、「是で丁度七竿、請取ました」と指荷ひ、行も黄昏亭主はほつと、「日和もよしよい出船」と、いひつゝ煙草烟筒、吸付にこそ入にけれ。家の世繼は今年四つ、傳は十九の丸額、親方よりも我遊び、「サア始りじや〜。面白い事〜、泣き辨慶の信太妻、東西々々、文彌、爰に哀を止めしは、此よし松に止めたり。元來其身は父計、母は去れて往なれたで、泣辨慶と申なり」由松「コリヤ伊五よ、もふ人形廻しいや〜。鼻様を呼でくれいやい」伊「ソレ其様に無理云しやると、旦那様にいふて此方はんも、追出さすぞ。跡の月からお釜が割れて、手代は手代で鼠の子か何ぞの様に、目が明ぬといふて追出し、飯焚は大きな欠したといふて隙遣り、今ではこなはんと、わしと旦那はんと計、どふで此内を抜そけするの cascading, ちよこ〜舟へ荷物が行。欠落するなら人形箱持て往こふぞや」由「イヤ人形廻よりおりやもふ寐たい」伊「ア

相聲同士―男同士で間に合はぬつこどーげんどんに

しやなり聲―わめき聲

一まき 一類

レもふおれ迄を唆す程にの、宜ござるはおれが抱て寐てやろ」由「われには乳がない物おりやいやじや」伊「アレ又無理いはしやる。こなたが女の子なら、乳よりよい物が有けれど、何をいふても相聲同士」是も涙の種ぞかし。折節表へ侍二人、「誰頼ふ義平殿はお宿にか」と、いふも潜く内からつこど、伊「旦那様は内に、我等人形廻しでいそがしい、用があらば這入つた」伊「イヤ案内致さぬも無禮、原郷右衛門大星力彌、密に御意得たいと申ておくりやれ」伊「何じや腹へり右衛門大食喰や、こりや堪らぬ。アレ旦那様大きなけなないどが見へました」と、叫ぶよし松引連て奥へ入ば、亭主義平、「又阿房めがしやなり聲」と、云つと出て、「エ、郷右衛門様力彌様、サアまあ是へ」「御免有」と座を占めて、郷右衛門、「段々貴公のお世話故萬事相調ひ、由良助もお禮に参る筈なれ共、鎌倉へ出立も今明日、何角と取込、俸力彌を名代として失禮のお断」義「是はく御念の入た義。急に御發足とござりますれば、何角お取込でござりませうに」カ「なるほど郷右衛門殿の仰の通、明早々出立の取込、自由ながら私に参りお禮も申、又お頼申た跡荷物も、彌今晚で積仕廻か、お尋申せと申渡しましてござります」義「成程お誂の彼道具一まき、段々大廻しで遣し、小手躰當小道具の類は、長持に仕込

以上七竿、今晚出船を幸船頭へ渡し、残るは竊挑燈鎖鉢卷、是は陸荷で跡より遣はす積りでござります」カ、郷右衛門様お聞なされましたか。いかるお世話でござりまする」

郷「いか様主人鹽治公の御恩を受た町人も多くござれ共、天河屋の義平は、武士も及ばぬ男氣な者、と由良殿が見込、大事をお頼申されたも尤、併鎚長刀は格別、鎖鑊の繼梯子のと申物は常ならぬ道具、お買なさるゝに不思議は立ませなんだかな」義「イヤ其義は細工人へ手前の所は申さず、手附を渡し金と引替に仕る故、何處の誰と先様には存ませぬ」カ、成程尤、次手に力彌めもお尋申ましょ。内へ道具を取込、荷物の拵へ御家來中の見る目は、どふしてお忍びなされましたな」義「ホウ夫も御尤のお尋、此義を頼まれますると、女房は親里へ歸し、召使は垂邪を付て、段々に隙遣はし、残るはあほうと四つに成盼、洩る筋はござりませぬ」カ、扱々驚入ましてござりまする。其旨を親共へも申聞して安堵させませう。郷右衛門殿お立なされませぬか」郷「いか様出立に心急きまする。義平殿お暇申ませう」義「然らば由良助様へも」二人宜しう申聞ませう」義「おさらば」二人さらば」と引別れ、二人は旅宿へ立歸る。表閉めんとする所へ、此家の舅太田了竹、「ヲットしめまい宿にか」と、ずつと通つてきよろゝ眼、義「是は親仁様ようこそお

さしてもない
左程にもない

出。扱此間は女房そのを養生がてら遣はし置、嘸お世話。お藥でも給まするかな」了「ア藥も吞まする食も喰ます」義「夫は重疊」了「イヤ重疊でござらぬ。手前も國元に居た時は、斧九太夫殿から扶持も貰ひ相應の身代。今は一僕さへ召使はぬ所へ、さしてもない病氣を、養生さしてくれよ、と指越れたは子細こそあらん。ガ夫はとも有、生若い女、不埒が有ては貴殿も立ず、身共も皺腹でも切ねばならぬ。所で一つの相談。先世間は隙やり分暇の狀をおこして置いて、ハテ何時でも爰の勝手に呼戻す迄の事、たつた一筆つい書て下され」と、輕ういふのも物工、一物有と知ながら、いやといはど女房を直に戻さん、戻りては頼まれた人々へ詞も立ず、と取置つ思案する程、了「いやかどふじや。不得心なら此方には片時置れず戻すからは、此了竹もにじり込へたばつて俱に厄介。いやか應かの返答」と、込付られて追の義平、工に乘が口惜や、と思へどこちらの一大事、見出されてはと懸硯、取て引寄さらく」と書認め、義「是やるからは了竹殿、親でなし子でなし、重て足踏お仕やんな。底工有暇の狀、弱身を喰ふてやるが残念。持て往きやれ」と投付れば、手早く取て懷中し、了「テ、よい推量。聞ば此間より浪人共が入込ひそめくより、そのめに問へ共しらぬとぬかす。何仕出そふも知ぬ聲、娘を添して置が氣遣。幸去歴々から貰掛けら

一杯参つて―だ
まされて

こうけ―婆家と
かく威光

れ、去狀取と直に嫁入さする相談、一杯参つて重疊々々「義」ホウ譬去狀なき辻も、子
までなしたる夫を捨、外へ嫁入する性根なら、心は残らぬ勝手く「エ、テ、勝手にする
は親のこうけ。今宵の内に嫁らする」義「ヤア細言吐かずと早歸れ」と、鶯、擱で門口よ
り、外へ蹴出して跡ぴつしやり。這々起て、「エ、コリヤ義平、なんほ擱でほり出して、嫁
らす先々仕拵へ金、温まつて蹴られたりや、どふやら疝氣が直つた」と、口は達者に足
腰を、撫つ擦りつ逃ほえに、呟きく立歸る。月の曇に影隠す、隣家も寢入亥の刻過、此
家を目懸けて捕手の人数、十手早繩腰挑燈、灯影を隠して窺ひく、犬と思しき家來を
招き、耳打すれば指心得、門の戸せはしく打叩く。義「誰じやく」も及腰、「イヤ宵に來
た大舟の船頭でござる。舟賃の算用が違ふた、ちよつと明て下され」義「ハテ仰山な。僅
な事である。明日來たく」船頭「イヤ今夜受ける舟、仕切て貰はにや出されませぬ」と、い
ふも聲高近所の聞へと、義平は立出何心なく、門の戸を明ると其儘、「捕たく、動くな
上意」と追取巻。義「コハ何故」と四方八方、眼を配れば捕手の兩人、「ヤア何故とは横
道者、儕鹽冶判官が家來大星由良助に頼れ、武具馬具を買調へ、大廻にて鎌倉へ遣はす
條、急召捕拷問せよとの御上意、遁れぬ所じや腕廻せ」義「是は思ひも寄ぬお咎、左様の

笑本―春畫を具
足櫃に入る事
當時の習はし

覺聊なし。定て夫は人違へ」と、いはせも立す、捕ヤアぬかすまい。争はれぬ證據有、ソレ家來共「家」はつ」と心得持來るは、宵に積んだる莞筵荷の長持、見るより義平は心も空、「ソレ動かすな」と四方の十手、其間に荷物を切解き、長持明んとする所を、飛懸つて下部を蹴退け、蓋の上にどつかと座り、義ヤア龜忽千萬。此長持の内に入置たは、去大名の奥方より、お詔のお手道具、お具足櫃の笑本、笑ひ道具の注文迄、其名を記置たれば、明さしては歷々のお家のお名のお出る事。御覽有てはいづれもの、お身の上にも懸りませうぞ」捕ヤア彌胡亂者。中々大抵では白狀致すまい。ソレ申合せた通」「合點でござる」と一間へ駈入、一子よし松を引立出、「サア義平、長持の内は兎も有、鹽冶浪人一統に堅まり、師直を討密事の段々、儕能知つらん。有やうにいへばよし、云はぬと忽躬が身の上。コリヤ是を見よ」と拔刀、稚き咽に指付られ、はつとは思へど色も變ぜず、義「ハ、女童を責る様に、人質取ての御詮義。天河屋の義平は男でござるぞ。子に羈れ存せぬ事を存たとは得申さぬ。曾て何にも存せぬ知らぬ、知ぬといふから金輪ならく。憎しと思はど其躬、我見る前で殺したく」捕テモ胴性骨の太い奴。管鑢鐵砲鎖蓼四十六本の印迄、調へ遣つたる儕が、知ぬといふて云はして置こふか。白狀せぬと一寸様一

異議—威儀

さもそふづーい
かにもさうあら
う

分刻に刻むが何と」義ヲ、面白く刻まれう。武具は勿論公家武家の、冠烏帽子下女小者が藁沓迄、買調へて賣が商人。それ不思議迎御詮義あらば、日本に人種は有まい。一寸試も三寸縄も、商賣故に取るゝ命、惜いと思はぬサア殺せ。盼も目の前突々々。一寸試は腕から切か胸から裂か、肩骨背骨も望次第」と、指付突付我子をもぎ取、「子に羈れぬ性根を見よ」と、紋殺すべき其吃相。「ヤレ聊爾せまい義平殿、暫しく」と長持より、大星由良助良金、立出る體見て悔り、捕手の人々一時に、十手捕縄打捨て、遙下つて座を占むる。異義を正して由良助、義平に向ひ手をつかへ、「扱々驚入たる御心底、泥中の蓮砂の中の金とは貴公の御事、さもあらんさもそふづ、と見込で頼んだ一大事、此由良助は微塵聊、お疑がひ申さね共、馴染近付でなき此人々、四十人余の中にも、天河屋の義平は生れながらの町人、今にも捕られ詮義に逢はど、如何あらん何とかいはん、殊に寵愛の子も有ば、子に迷ふは親心と、評義區々案じに胸も休まらず、所詮一心の定めし所を見せ、古傍輩の者共へ安堵させん爲、爲まじき事とは存ながら、右の仕合龔忽の段は眞平々々。花は櫻木人は武士と申せ共、いつかなく武士も及ばぬ御所存、百萬騎の強敵は防共、左程に性根は据らぬ物、貴公の一心を借受我々が手本とし、敵師直を討

人と馬に云々！
諺にて馬には乗
つて見よ人には
添うて見よ
秦龜の云々―身
の程知らず他人
の眞似したがる
諺

ならば、たゞへがんせき 巖石の中になかに籠り、てつどう 鐵洞の内に隠るゝ共、やはか仕損じ申べき。人有中にも人
なしと申せ共、町家の中に有ば有物。一味徒黨の者共の爲には、生土共氏神共尊奉ら
ずんば、御恩の冥加に盡果ませう。みやうが 靜謐の代には賢者も顯はれず、へエ、惜いかな悔い
かな。亡君御存生の折ならば、一方の簇大將、一國の政道お預け申た連、惜からぬ御器
量。是に竝ぶ大驚文吾矢間重太郎を始め、小寺高松堀尾板倉片山等、潰れし眼を開かす
る、妙藥名醫の心魂、有がたしく」とすさつて三拜、人々も「無骨の段眞平」と、疊
に頭を摺付る。義「ヤレ夫は迷惑、お手上られて下さりませ。惣體人と馬には、乗て見よ
添て見よと申せば、お馴染ない御旁は、氣遣ひに思召すも尤。私元は軽い者、お國の
御用承はつてより、經上つた此身代、判官様の様子承はつて俱に無念、何卒此恥辱雪や
うはないかと、りきんで見ても秦龜のじたんだ、及ばぬ事と存た所へ、由良助様のお
頼こそ心得たと向ふ見ず、俱にお力付る計、情ないは町人の身の上。手一合でも御扶持
を戴きましたらば、此度の思し立、袖褌に取付て成共お供申、いづれも様へ息つぎの、
茶水でも汲ませうに、夫も叶はぬはよくく、町人は淺ましい物。是を思へばお主の御恩、
刀の威光は有がたい物、それ故にこそお命捨らるゝ、御義しう存まする。猶も冥途で御奉

御内証—御内儀

手打—義平が手製の蕎麥敵を討つ縁

二人—大鷲矢間の兩人

化生—ばけもの

どんな—鈍な、馬鹿な

公。お序に義平めが、志もお執成」と、厚き詞に人々も、思はず涙催して、奥齒嚙割計なり。
 由良助取敢へず、「今晚鎌倉へ出立、本望遂るも百日とは過すまじ。承はれば御内証迄、
 省給ふ由重々のお志。追付夫も呼返させ申さん、御不自由も今暫く。早お暇」と立上る。
 義「ヤレ申さば日出度旅立。いづれも様へも御酒一つ」由「否夫は」義「ハテ扱祝ふて手打の
 蕎麥切」由「ヤ手打とは吉相。然らば大鷲矢間御兩人は跡に残、先手組の人々は、郷右衛門
 力彌を誘ひ、佐田の森迄お先へ」「いざ此方へ」と亭主が案内、「お辭義は無禮」と由良助
 ふたりを伴ひ入月と、又出る月と二つ輪の、親と夫との中に立、おそのは一人小挑燈、闇き思
 ひも子故の間、あやなき門を打叩き、「伊五よく」と呼聲が、寐耳にふつと阿房は駈出、
 「おれ呼だは誰じや、化生の者か迷ひの者か」その「イヤそのじや。爰明てくれ」由「そふいふ
 ても氣味が悪い。必ばあといふまいぞ」と云つゝ門の戸押開き、由「エ、おゑさんかよう
 ぐんしたの。一人歩行をするとナ、病犬が嚙むぞへ」その「ナ、犬に成共嚙まれて死だら、
 今の思ひは有まいに、おりや去れたはいやい」由「どんな事に成らんしたなア」その「旦那
 殿は寐てか」由「イ、エ」その「留主か」由「イ、エ」その「何の事じやぞやい」由「何の事やら
 わしも知らぬが、宵のくちに猫が鼠を取たかして、捕つた」と大勢來たが、ちやつと

ざんざん陽氣に騒ぐ

給仕ひろげ給
仕せよ

持て戻ると云々
—親が去狀を持
て歸ると即ち嫁
入さすとして
涕紙袋—四角に
縫うて紐つけた
る紙入

おれは蒲團被つたればつる寐入た。今其和郎達と奥で酒盛、ざんざんやつてどござんす」
その「ハテ合點のいかぬ。そふしてほんは寐たか」伊「アイ是はよう寐てどござんす」
その「旦那殿と寐たか」伊「イ、エ」その「われと寐たか」伊「イ、エ、つる一人轉りと」その「な
ぜ伽して寐さしてくれぬ」伊「夫でもわしにも旦那様にも、乳がないといふて泣てばつか
り」その「へエ、可愛やそふである」。夫ばつかりが實の事」と、「わつ」と泣出す門の
口、空にしられぬ雨の足、乾く袂もなかりける。「ヤイく伊五め、どこに居る」と、呼
立出る主の義平。伊「アイく爰に」と駈入跡、尻目に懸けて簀「たはけめが、奥へ住て給
仕ひろけ」と、呵追遣り門の戸を、さすを押へて、その「コレ旦那殿、いふ事が有爰明て」
義「イヤ聞事もなしふ事も、内證一つの畜生め、穢はしい其處退こふ」「イヤ親と一所
でない證據、それ見て疑ひ晴てたべ」と、戸の透よりも投込一通、拾ひ取間に付込女房。
夫は書物一目見て、「コリヤ最前遣つた暇の狀。是戻してどふするのじや」その「どふする
とは聞へませぬ。親子竹の悪工は、常からよう知ての事。譬どの様な事有逆、何故隙狀
を下んした。持て戻ると嫁らすと、思ひも寄ぬ拵、嬉しい顔で油斷させ、涕紙袋の去狀
を、盗でわしは逃て來ました。お前はよし松可愛ないか。去てあの子を繼母に、かける

さんばら髪—亂
れ髪

湛納—満足

氣かいの胴欲な」と、縋り歎けば、議「ヤア其恨は逆ねぢ。此内を往なす折、云囁たを何と聞た。様子有て其方に隙遣でなし、暫の内親里へ歸つて居よ、舅了竹は元九太夫が扶持人、心解けねば子細はいはぬ、病氣の躰にもてなし起臥も自由にすな、櫛も取なと云付遣つたをなぜ忘れた。さんばら髪で居者を、嫁にとろとは云ぬはい。何の儕がよし松が可愛かる。晝は一日あほうめが、欺し賺せど夜に成と、噉様く〜と尋居る。かゝは追付もふ爰へと、だまして寐させど能う寐入ず、呵て寐さそと擲付、怖顔すりや聲上ず、しく〜泣て居るを見ては、身節が碎て堪へらるゝ物じやない。是を思へば親の恩、子を持て知るといふ、不孝の罰と我身をば、悔んで夜と俱泣明す。夕部も三度抱上て、もふ連て往こ抱ていこ、と門口迄出たれ共、一夜で湛納するでもなし、五十日隙どろやら、百日隔て置こふやら、知ぬ事に馴染しては、跡の難義と五町三町、ゆぶり行いて擲付、寐さしてはそつと轉し、我肌付れば現にも、乳をさがしてしがみ付、僅な間の別れでさへ、戀焦るゝ物、一生を引分ふとは思はね共、是非に及ばず暇の狀、了竹へ渡せしを、内證にて受取ては、親の赦さぬ不義の科、心よからず持て歸れ。是迄の縁約束事、死だと思へば事濟」と、切離よき男氣は、常を知る程猶悲しく、その「此家に居るとお前が立ず、内

何ほでもーどろ
あつても

へ往ぬると嫁らにやならず、悲しい者はわたし一人。是が別れにならふも知れぬ。よし松を起してちよつと逢して下さんせ」義「イヤそれならぬ。今逢て今別るゝ其身、跡の思ひが猶不便な。分けて今宵はお客も有、くどくいはすと早くお往きやれ」その「それでもちよつとよし松に」義「ハテ扱未練な。跡の難義を思はずや」と、無理に引立去狀も、俱に渡して門先へ、心強くも突出し、義「子が可愛くば了竹へ、詫言立て春迄も、かくまひ貰はゞ思案もあらん。それ叶はずは是限り」と、門の戸閉めて内に入。その「ノウ夫が叶ふ程なれば、此思ひはござんせぬ。つれないぞや我夫、科もない身を去のみか、我子に迄逢さぬは、あんまり酷い胸欲な。顔見る迄は何ほでも、往なぬく」と門打叩き、「情じや慈悲じや爰明て、寐顔成共見せて給べ。コレ手を合せ拜ます、むごいわいの」とどふど伏し、前後不覺に泣けるが、その「ハア恨むまい歎くまい。なま中に顔見たら、かゝ様かと取付て、離しもせまいし離も成まい。今宵往ぬれば今宵の嫁入、あす迄待れぬわしが命。さらばでござるさらばや」と、いふては戸口へ耳を寄、若や我子が聲するか、顔でも見せてくれるかと、窺ひ聞と音もせず。「ハア是非もなや迄」と、思ひ切て駈け出す向ふへ、目計出した大男、道を塞いで引捉へ、是はといふ間も情なや、すらりと拔

無息—無茶

あた忌々し—あ
たは罵聲

左少—些少

て島田鬚、根よりふつと切取て、懷迄を引さらへ、いづく共なく逡行し、無法無息ぞ是非もなき。その「ノウ憎や腹立や、何者かむごたらしう髪切て、書た物迄取て往んだ。櫛笄の盗人なら、いつそ殺してく」と、泣叫ぶ聲に驚き、義平は思はず駈出しが、「ハア爰が男の魂の、亂口よ」と喰しはり、猶豫ふ中に奥よりも、「御亭主く、義平殿」と立出る由良助、「段々御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申越ん。猶跡荷物の義、早飛脚を以てお頼申。夜の明ぬ内早お暇」義いか様今暫しとも申されぬ刻限。道中御堅勝で、御吉左右を相待まする」典著致さば早速書翰を以てお知らせ申そふ。返すくも此度のお世話、詞でお禮は云盡されませぬ。ソレ矢間大鷲御亭主へ置土産」「はつ」と文吾十太郎、扇を時の白臺と、乗て出たる一包、「是は貴公へ是は又、御内寶おその殿へ、左少ながら」と指出す。義平はむつと顔色替り、「詞でいはれぬ禮と有ば、イヤコレ禮物受ふと存じ、命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り、小判の耳で面張るのか」典イヤ我々は娑婆の暇、貴殿は残る此世の宿縁。御臺かほよ御前の義もお頼申さん爲、寸志計」と云残し、表へ出れば猶むつと。「性根魂を見違へたか。踏付た仕方あた忌々し、穢し」と包し進物蹴飛ばせば、包ほどけて内よりばらり、女房駈寄、その「コレ是はわしが櫛笄切

天を山といふ一
天河の合詞を誤
りてと山河と言
傳ふ

れた髪、ヤア／＼此一包は去狀、ホイ扱は最前切たのは」典、ホウ此由良助が、大
驚文吾を裏道より廻らせ、根よりふつつと切した心は、いかな親でも尼法師を、嫁らそ
ふ共いふまいし、嫁に取者は猶有まい。其髪の延る間も凡百日、我々本望遂るも百日は
過ぎ。討課せた後目出度祝言。其時には櫛笄、其切髪を添に入、笄鬘の三國一。先
夫迄は尼の乳母、一季半季の奉公人。其肝煎は大驚文吾、同矢間十太郎、此兩人が連中へ
大事は洩ぬといふ請判、由良助は冥途から、仲人致さん義平殿」義「ハア、重々のお志
お禮申せ女房」その「わたしが爲には命の親」典「イヤお禮に及ばず。返禮と申スも九牛が
一毛。義平殿にも町人ならずば、俱に出達とのお望幸かな、兼て夜討と存れば、敵中
へ入込時、貴殿の家名の天河屋を、直に夜討の合詞、天と懸けなば河と答へ、四十人余
の者共が、天よ河よと申なら、貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字、
平はたいらか輒く本望。早お暇」と立出る。末世に天を山といふ、由良助が孫吳の術、忠
臣藏共いひはやす、婆婆の言葉の定めなき、わかれ別れて三重いでてゆく。

第十一

をわか手―若手
にかく
上る―河の縁
輝く―星の縁

假名實名―假名
は通稱實名は名
乗

柔能剛を制し、弱能強を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高定の家臣、大星由良助是れを守つて、既に一味の勇士四十余騎、獵船に取乗て、苦深々と稻村が崎の油斷を頼にて、岸の岩根に漕寄て、先一番に打上るは大星由良助義金、二番目は原郷右衛門、第三番目は大星力彌、跡に續て竹森喜多八片山源太、先手跡舟段々に、列を亂さず立出る。奥山孫七須田五郎、著たる羽織の合印、いろはにほへとと立竝ぶ。勝田早見遠の森、音に聞へし片山源吾、大鷲源吾かけやの大槌引提く、吉田岡崎ちりぬるを、わか手は小寺立川甚兵衛、不破前原深川彌次郎、得たる半弓手挾で、上るは川瀬忠太夫、空に輝く大星瀬平、よたれそつねならむうゐの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀、やまけふこえて朝霧の、立竝びたる芦野や菅野、千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の繼梯子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同彌九郎遊所の酒にゐひもせぬ、由良助が智略にて、八尺許の大竹に弦を懸けてぞ持たりける。後陣は矢間十太郎、遙跡より身を卑下し、出るは寺岡平右衛門、假名實名袖印、其數四十六人なり。鎖袴に黒羽織、忠義の胸當打揃ふ、實に忠臣のかな手本、典義心の手本義平が家名、天と河との合詞、忘るな兼ての云台、矢間

千崎小寺の面々、筋力彌を始とし、表門より入れくく。郷右衛門と某は裏門より
込入て、相圖の笛を吹ならば、時分はよしと乗込よ。取べき首は只一つ」と、由良助に
下知せられ、怒の眼一時に、館を遙に睨付裏と表へ三重別れ行。斯とはしらず高武藏守
師直は、由良助が放埒に、心も緩む油斷酒、藝子遊女に舞諷はせ、藥師寺を上客にて、
身の程しらぬ大騒、果は難魚寐の不行義に、前後もしらぬ寐入ばな、非常を守る番人の、
柵のみぞ残りけり。表裏一度に手筈を極め、矢間千崎不敵の二人、表門に忍び寄内の
様子を窺へば、夜廻りと思しき柵、遠音をさせば能折と、例の嗜む繼梯子、高堀に打懸
けく、雲井迄もと蜘蛛の、登課せた堀の屋根、早柵の近付音、ひらりと下りるを見
付し番人、「スハ何者」と駈寄を取て引伏せ高小手、能い案内と息を留め、縄先腰に引
懸けて、柵奪ひかつちかち、役所々々を打廻り、窺ひ廻るぞ不敵なる。早裏門に呼子
の笛、時分はよしと兩人は、柵合せて天河と、貫の木外して大門をくはらりと開けば、
力彌を始め杉野木村三村の一黨、我もくと込入て、見れば一面雨戸の固め。父が教へ
し雪折は、爰ぞと下知して丸竹に、弦を懸けたる雨戸の鴨居、敷居に挟んで一時に、一
二二三つの拍子にて、かけたる弦をてうど切ば、鴨居はあがり敷居は下り、雨戸外れてば

た／＼、「そりや乗込」と天河の、聲響かして亂入。「スハ夜討ぞ」と松明挑燈、裏門よりも込入て、一方は郷右衛門、一方は由良助、床几に掛つて下知をなす。小勢なれ共寄手は今宵、必死の勇者秘術を盡せば、山良助、「余の者に日な懸けそ、只師直を討取」と、郷右衛門諸共に、八方に下知すれば、はやりをの若者共、揉立／＼三重切結ぶ。北隣は仁木播磨守、南隣は石堂右馬之丞、兩隣より何事か、と家の棟に武者を上、挑燈星のごとくにて、「ヤア／＼御屋敷騒動の聲、太刀音矢叫事騒がしく、狼藉者が盜賊か、但非常の沙汰なるか、承はり届けよ、と主人申付られし」と、高らかに呼はつたり。由良助取敢ず、「是は鹽治判官が家來の者共、主君の怨を報はん爲四十余人の者共が、千變萬化の戦ひ。斯申は大星由良助原郷右衛門、尊氏御兄弟へお恨なし。元來兩隣仁木石堂殿へ、何の遺恨も候はねば、卒爾致さん様もなし。火の用心は堅く申付たれば、是以て御用心に及ばぬ事。只穩便に捨置れよ。夫連も隣家の事聞捨ならず、加勢あらば力なく一矢仕らん」と高聲に答へたり。兩家の人々聞届け「御神妙く。我人主人持たる身は、尤斯こそ有べけれ。御用あらば承はらん。挑燈引」と一時に、靜返つて扣へける。一時計の戦ひに、寄手は僅二三人、薄手を負たる計にて、敵の手負は數しれず。され共

るせ者―くせも
のといふに同じ
わるけれもせぜ
―臆せず
浮木にあへる云
云―逢ひ難き折
を得る法華經に
佛難得、值如優
曇波羅華、又如
一服之龜、值浮
木之孔とあり

大將師直と覺しき者もなき所に、足輕寺岡平右衛門、館の内を飛廻り、平部屋へは勿論、上は天井下は簀子、井の内迄鎧を入れて捜せ共、師直が行衛知ず。寐間と覺しき所を見れば、夜著蒲團の溫り、此寒夜にさめざるは、逃て間なしと覺へたり。表の方が氣づかはし」と斷行を、「ヤレ平右衛門待く」と、矢間十太郎重行、師直を宙に引立、「コレいづれも、柴部屋に隠れしを、見付出して生捕し」と、聞より大勢花に露、いきいき勇で由良助、「ヤレでかされた手柄々々。去ながら迂かつに殺すな。假にも天下の執事職、殺すにも禮義有」と、請取て上座に据へ、由我々倍臣の身として、御館へふん込狼藉仕るも主君の怨を報じたさ、慮外の程御赦し下され。御尋常に御首を給はるべし」と相述べ、師直も追のふせ者、わろびれもせず、「ヲ、尤々、覺悟は兼てサア首取」と、油斷さして拔打にはつしと切。引外して腕捻上、「ハア、しばらくしき御手向ひ。サアいづれも日比の鬱憤此時」と、由良助が初太刀にて、四十余人が聲々に、「浮木にあへる盲龜は是。三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しや」と、踊上り飛上り、筐の刀で首かき落し、悦び勇んで舞も有、「妻を捨子に別れ、老たる親を失ひしも、此首一つ見ん爲よ。今日はいか成吉日ぞ」と、首を擲つ喰付つ、一同に「わつ」と嬉し泣、理り過て哀なり。由

良助は懷中より亡君の位牌を出し、床の間の卓に載奉り、師直が首血汐を濟め手向申、兜に入し香を炷、退つて三拜九拜し、「恐ながら亡君尊靈、蓮性院見利大居士へ申上奉る。去御切腹の其折から、跡弔へと下されし九寸五分にて、師直が首かき落し、御位牌に手向奉る。草葉の陰にて御請取下さるべし」と、涙と俱に禮拜し、「いざ、御一人づつ御焼香」皆先惣大將なれば御自分様より」典「イヤ拙者より先さきへ、矢間十太郎殿、御焼香なされ」矢「イヤ、夫は存も寄ず。いづれもの手前と申、御最眞は却て迷惑」典「イヤ最眞でござらぬ、四十人余の衆中が、師直が首取んと一身を抛中に、貴殿一人、柴部屋より見付出し、生捕になされたは、よく、主君鹽治尊靈の、お心に叶ひし矢間殿、お義しう存る。何といづれも」皆「御尤に存まする」矢「夫は何共」典「ハテ捌刻限が延ます」矢「然らば御免」と一の焼香、皆「二番目は由良殿、いざ御立」と勸むれば、典「イヤまだ外に焼香の致し人有」皆「そりや何者誰人」と、問へば大星懷中より、碁盤綺の財布取出し、「是が忠臣二番目の焼香、早の勘平がなれの果。其身は不義の誤りから一味同心も叶はず、せめては石牌の連中に、と女房賣て金調へ、其金故に舅は討れ金は戻され、詮方なく腹切て相果し、其時の勘平が心、嘸無念に有ふ口惜からふ。金戻したは由良

光明寺―鎌倉に
在り泉岳寺の作
替へ

竹の榮―暗に作
者竹田出雲を仄
めかす

助が一生の誤り、不便な最後を遂さしたと、片時忘れず肌放さず、今宵夜討も財布と同道。平右衛門そちが爲には妹嫁。焼香させよ」と投遣れば、平「ハ、ハ、ハ、ハ、はつ」と押戴押戴、「草葉の陰より嘸有がたう存ましょ。冥加に余る仕合」と、財布を香爐の上に著、「二番の焼香早の勘平重氏」と、高らかに呼はりし、聲も涙に震はすれば、列座の人も残念の、胸も張裂計なり。思ひがけなや人馬の音、山谷に響く攻太鼓、鬨をどつとぞ上ける。由良助ちつ共騒がず、「扱は師直が一家の武士取懸けしと覺たり。罪作に何かせん」と、覺悟の所へ、桃井若狹助後馳に駈付給ひ、「ヤア〜大星、今表門より攻懸けたは、師直が弟師安。此所で腹切ては、敵に恐れしと後代迄の譏。鹽治の御菩提所光明寺へ立退べし」と、仰にはつと由良助、「いか様最期を遂る共、亡君の墓の前、仰に従ひ立退申さん。御殿頼上る」と、いふ間もあらせず、何處に忍び居たりけん、藥師寺次郎鷺坂伴内、「おのれ大星遁さじ」と、右往左往に討てかゝる。力彌すかさず請流し請流し、暫が内は討合しが、はづみを打て討太刀に、袈裟にかけられ、藥師寺最期。交す二の太刀足切れ、尾にも繼がれず鷺坂伴内、其儘息は絶へにける。由チ、手柄く」と稱美の詞。末世末代傳ふる義臣、是も偏に君が代の、久しき例竹の葉の、榮を爰に書残す。

